「宗達」

森本洵司

（人　物）

俵屋宗達
本阿弥光悦
打它公軌（うだきんのり）
宗雪
丑寅（うしとら）
女将
角倉素案
紙師宗二
宗見
宗運
利慶
慶春
宗充
狩野采女（うぬめ）
狩野山楽
狩野派絵師たち

（装置）

装置を排したオープンステージ。
中央前、　俵屋離れとなる絵所のスペース。（高座）
中央奥、　白パネル。
上下手、　それぞれに天井から長白幕を地まで垂らす。
（映写の際は、パネル、垂れ幕ともにスクリーンとなる。）
絵所手前、　横向きの長ワゴン、茶室や縁側の設定。
（絵所、縁側、茶室は可動式。
俵屋以外の場面で配置を変えられることとする。）
垂れ幕の脇、背後は通路として行き交え、下手奥、家の内部に通じる設定。
舞台最前面、中庭の設定。下手前袖、上手奥袖は俵屋外に通じる設定。
舞台最奥、　ぐるりとパネルで覆い、これも映写スクリーンとなる。
※衣装は、着物、髷（まげ）に限らず。和のテイストを残したMODEを尚良しとする。

※（1）※

（京都　一六三七年）

俵屋　茶室。

茶を点てる亭主、俵屋宗雪。

座して向き合う客、打陀公軌。

宗雪　「そう、岩のような男にございます。

長い年月、風雨にさらされ、時の移ろいだけを身に受けた、

まこと、自然に在る、ごつごつとした大岩にございます。

料紙、雁皮紙に向かえば物を言わず、坐して固まる修験者そのもの。

何日でも、じっとそのままでおります。

ところが、一たび描き出すと一気呵成、そうなるともう追いつきません。

ご承知の通り色どりは金銀を好み、五色も鮮やか巧みに置きやる。

そしてあの大胆な余白と配置。

京、江戸をぐるりと見渡しても、他にたぐいのない物に仕上がります。

それ故、自分の心に描き出すまでは何事にも一向動じず、

ただただ機を待ち続けておるのでございます」

宗雪、頭を下げ、茶碗を差し出す。

公軌　「きぬかけの道を抜け、鳴滝の奥、忘れ去られたかつての名刹。

妙光寺といえば、帝の勅願寺ともなり、三種の神器を奉る間さえあったそうで。

ところが昨今、見る影なく荒れ果て、人もまばらに寄りつかぬ様子。

私も寄る年波。今生では神仏のご加護に恵まれた。

商い、友人、跡取りにも恵まれ、お陰様で盤石、家も引き継げました。

この上、役目を果たしたからには、最後のご奉公と、

日頃、ご縁のある建仁寺、三江紹益様の達てのお申し出を引き受けた次第」

宗雪　「新たにご本尊をご寄進いたし、方丈、本堂を設けられましたそうで」

公軌　「あとは、中興開山の精舎に相応しく、守り絵をご奉納申し上げたい。

それには、今生、京で一番のお方、法橋俵屋の宗達様において他なく。

何卒、宗達様にしか描けぬ一枚を、と、お頼み致しました」

宗雪　「お使いの方よりそれをお聞きして、当人、俄かに奮い立ちました様子」

公軌　「親方様におかれては、無理を承知でお願いしたところ、

日を待たず二つ返事でお引き受け頂けた。

六波羅の絵描きは、仏の道を尊び、信心に厚いお方との評判はその通り。

法橋の名に偽りなし。あらためて胸を撫で下ろしました。

こうしてお近くへ寄る時々にお邪魔を致すのは、

日ごと訪れるたびにお聞きする、あの方についてのお話が真に興味深く。

どうか宗雪様、ご面倒にお感じあそばすな」

宗雪　「滅相もない。打陀様におかれましては未だ主人とすれ違い。真に心苦しく」

公軌　「寺の開山は間もなくには違いないが、何も急ぐことは。

何よりあの方をご信用申し上げております」

宗雪　「お心遣い、痛み入ります次第で」
　　公軌、茶碗を返す。
　　遠くで祭囃子の鳴り物。
公軌　「祇園の山鉾。夏の訪れ」
宗雪　「ここいらは八坂さんに近うございますからな。このひと月は賑やか」
公軌　「さすれば、今日はあちらの方も飛び回っておられるかな」
宗雪　「あちらの方」
公軌　「いやいや、実のところを申しますと、こちらへ伺うのにはもう一つ楽しみが別に。何と言いましたかな、あの方。この間、来た折にもやれ神輿洗いだとか、花街の集まりとかで大層、賑やかに」
宗雪　「ああ、お恥ずかしい。無作法な家の職人の一人で」
公軌　「あの方のお話が面白く、家に帰りましても、一人思い出しては含み笑い」
宗雪　「家の躾が行き届かず。不調法にございまして」
　　奥から餅を頬張りながらごろりと登場する男、丑寅。
丑寅　「おやァ、また来てやがるな、豪商」
宗雪　「お前！いつからそんな所で」
公軌　「この男。この男」
丑寅　「宗雪、陰で俺の悪口言ってやがったな」
宗雪　「ご挨拶を。こちらは打陀公軌様。此度のご依頼主だぞ」
丑寅　「糸屋で儲けて蔵建てた豪商の十右衛門だろ。工房で職人連中が喋ってた」
公軌　「何という、お前」
丑寅　「すげえ金持ちだって皆が噂を。お前もいたじゃねえか」
宗雪　「嘘だ嘘だ。まさかそのようなこと」
公軌　「（笑）ホンに、宗達好みは型破り」
丑寅　「何を。けなしてやがるな」
公軌　「褒めておるのだ。快活だと」
丑寅　「どうだか。商人は口が巧みで隙見せりゃ人を騙す」
宗雪　「悪態が過ぎるぞ、この阿呆」
丑寅　「阿呆とは何だ」
宗雪　「何だとは何だ。主人に向かってその口の利きよう」
丑寅　「いくらお前ェが入り婿だろうと、俺はお前ェの弟子でも何でもねえ。俺の師匠は親方一人」
宗雪　「何でもないわけなかろう。お店の工房は今、私が棟梁。お前は何だ。その下の職人に過ぎん。弟子でなくとも弟分には違いない」
丑寅　「真面目か。理屈じゃ確かにそうだがな」
　　丑寅、餅を胸に詰まらせ。
宗雪　「そら罰が当たった。水か、奥へ下がってもらって来い」
丑寅　「（茶椀を指し）いいよいいよ。いいからそいつで」
宗雪　「何を言うか、失礼な」
丑寅　「一寸、頼むよ、爺さん」

公軌　「（茶碗に白湯を入れてやり）よしきた」
宗雪　「公軌様…公軌様」
　　丑寅、茶碗を受け取り白湯を飲む。
丑寅　「（息を戻し）ああ、お陀仏かと思った」
宗雪　「申し訳ございません」
丑寅　「（菓子鉢に手を伸ばし頬張る）ついでにこいつも」
宗雪　「いい加減にしろ」
公軌　「ホンに面白い男よ」
宗雪　「誠にもってお恥ずかしい限り。（丑寅に）お前、後でこっぴどく…さっさと下がれ」
丑寅　「行きゃいいんだろ行きゃ。
　しかし、言っといてやるが今日も何にも起こらんぜ。
　親方はいつもと同じ、だんまりのまんま」
宗雪　「親父様はどこに」
丑寅　「本日の行き先は三十三間堂。仏像の前でじっとして固まってら」
　　一同の空間を横切り、登場する一人の男。
　　舞台前面、黙して座り込む。
　　これが、俵屋宗達。
宗雪　「お前、主人を一人、置いてきたのか」
丑寅　「すぐに戻るよォ、すぐそこなんだから。飯食いに戻っただけだ。
　今朝は何を思い立ったか、夜が明ける前に出かけちまったからな。
　女将さんに叩き起こされて後を追いかけたんだぜ。眠い目こすってよ」
宗雪　「弟子ならそれを横で見るのも修行のうちだ」
丑寅　「だから真面目か。じっとして動かん者を見てたって仕様がねえっちゅうの」
公軌　「三十三間堂では何をご覧に」
丑寅　「千手観音に決まってるじゃねえか。
　あそこは観音さんばかり、ずらっと並んでるんだ」
公軌　「まあ、それは確かにそうだが」
丑寅　「あの長い廊下の端っこで、どっかと腰を下ろし、黙りこくって見てやがる。
　時々、ぶつぶつお経なんかつぶやいてよ。
　それでなくてもあそこは端から薄暗いんだ。いくら観音様とはいえ、
　あれだけある仏像の前でじっとされたら、気味が悪くなるのが人情というもんだ」
宗雪　「何が人情。お前は静かにじっとしているのが辛いだけだろ」
丑寅　「この間までは北野の天満宮へ、何たら言う絵巻もんを見せてもらいに通ってたが」
宗雪　「天神縁起絵巻。それくらい覚えとけ」
丑寅　「あそこにしても、あんまり度々来るもんだから、神官さんが薄気味悪がって、
　当面は遠慮してくれと俺に耳打ちしてきた。
　仕方がねえから、それとなく親方に伝えたらこの通りよ」
公軌　「北野天満宮に三十三間堂…。はて」
丑寅　「そういうわけで今日も無駄足。こいつは暫く通い詰めることになるんじゃねえか」
宗雪　「戻るのか」

丑寅「仕方ねえ」
宗雪「それなら、そっちは方角が違うじゃないか」
丑寅「そろそろ、お嬢たちの琴の稽古が終わりだからよ、迎えに行ってこなくちゃ」
宗雪「待て待て、うちの子はちゃんと姐やがついてる。何だってお前が」
丑寅「昨日、庭で逆立ちを見せてやったら、こいさんなんて、
お前は本当に愉快で楽しいって、きゃっきゃと喜ぶもんだからよ。
今日は何か他のもんを見せてやろうと」
宗雪「いらんいらんいらん。行儀作法を教わりに行ってるのに、そんな始末の悪いもん傍で
見せるな」
丑寅「（自分の尻を叩いてみせ）何が始末悪い」
宗雪「第一、お前が親しくする道理がない」
丑寅「一つ屋根の下で暮らしてるんじゃねえか」
宗雪「近づくな」
丑寅「分かったよ、そんなら今日は行かねえよ」
宗雪「そっちも方角が違うだろ」
丑寅「だったら、歌舞の稽古場で舞妓の踊りでも覗いてから」
宗雪「待て、待たんか」
丑寅「煩せえなあ、何だよ」
宗雪「お前今日は、どうも様子がおかしい。
いつもだったら、親父様の傍を離れようとしない癖に。
何かあるな、そうなんだろ」
丑寅「さあ、どうだかな…」
宗雪「何しでかした。それとも親父様に何か」
丑寅「そうじゃねえよ。何もねえ。何もな。しかし、あれだ…その、
ぼそりと気になることを言うもんだからよ」
宗雪「気になること」
丑寅「親方が言ったんだ」
宗雪「だから何を」
丑寅「おかしなこと。怖くなること」
公軌「おかしなこと」
丑寅「だから、だからよ。断っとくが本気かどうか分からんぜ。
俺だって、空耳かと聞きただしたくらいだ」
宗雪「前置きはいい。親父様は何と」
丑寅「だからよ…。これが今生、最後の筆、とか何とか」
宗雪「最後の筆。ホンとか。本当に親父様が」
公軌「これで筆を置かれる…そういうことですか」
宗雪「いいえ。家ではそんな話は何も」
丑寅「いや、だから、本気かどうか。しかし、そう言ったんだ。
その後、すっかり黙りこくって二度と口を開かねえ。
あれはな、絵の題材なんかを探してるんじゃねえよ。

心ん中の深い深い所でよ、話し合ってる。自分と。自分自身とよ。
問答してんだ。延々と」
公軌　「問答」
丑寅　「真っ暗な闇の中を覗いてやがる」
宗雪　「闇の中」
丑寅　「何だか分からねえけど、確かに何かを見つめてやがるのさ。
鬼神か亡者にでもとり憑かれたみてえによ。
今までとはまるで違う、とびきりの何かを。
それもたった一人でよ。
そいつを傍で見てると、何ていうか、こう…。
どうにもたまらねえ気持ちになってきて」
公軌　「なるほど。それで帰って来たのか」
宗雪　「一体、今度は何を描こうというのか…」
丑寅　「おかしいんだ。おかしいんだよ。あの野郎がいなくなっちまってから」
公軌　「あの野郎」
丑寅　「妙で、きざで、堅物で、ふざけてやがって、つかみどころなく、
いつも高みから見下ろしては、にやけた戯言ばかり。
それでいて時折見せるあの剃刀みたいな目つきで、
手にかけるものことごとく極上の品を生み出しやがる。
あいつ、あの野郎。天分の才を欲しいままにしやがって」
公軌　「そんなお人が」
宗雪　「親父様の頭の中は、いつもあの人の影を」
丑寅　「生涯かけて追い求めた、あの野郎」
宗雪　「あの人こそが創作の血であり熱であり」
丑寅　「いつも遠くにいるってのによ、それでいて何もかも見通してやがった」
公軌　「その方とは、一体」
丑寅　「親方にあの男と言ったら他にあるまい」
宗雪　「眩しい光です。日輪と言ってもいい」
丑寅　「いいや、あれこそ鬼の化身よ。
兎に角、あいつが未だに親方を惑わせてやがるんだ」
公軌　「誰なんです」
宗雪　「それがそれ。本阿弥光悦」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
能楽の地謡、入る。
宗達を残し、一同退場。

（俵屋　絵所　一六〇二年）
山姥の面をつけた男、地謡を謡う供を引き連れて登場。
本阿弥光悦、能舞。

地謡に紙師宗二。

（山姥）

「隔つる雲の身を変へ。
仮に自性を変化して
一念化性（いちねんけしょう）の鬼女となり
目前に来たれども、
邪正一如（じゃせいいちにょ）と見る時は、
色即是空そのままに
仏法あれば世法あり。
煩悩あれば菩提あり、
仏あれば衆生（しゅじょう）あり。
衆生あれば山姥もあり
柳は緑
花は紅の色々…」

光悦、舞を終える。

光二、地謡を終えてお辞儀。

光悦　「（面を取り）戯れ言。戯れ言」

宗達、お辞儀。

宗達　「これは。遥々、加賀よりお目見え」

光悦　「雪解けを待たず春のたより。古都の香りも懐かしく、
せめて最後に伏見の桜でも、愛でて送れば心満たしたものを」

宗二　「光悦様の父君、お亡くなりにつき、此度は、菩提寺の本法寺へ参られた」

宗達　「光二様が。いつ」

光悦　「年明けて間もなく。大往生に相応しく静かに息を引き取った。
加賀、前田公からも過分なご配慮賜り、おごそかに弔いを済ませた」

宗達　「それは、露知らず」

光悦　「気にすることはない。皆、父の言葉に従うたまで。
我らは日蓮上人教えの集まり。仏事には、意に沿う者が作法に従いて開けばよい。
親類縁者へ負担のなかりべく、亡き知らせは時季過ぎた後にとの遺言であった。
長年ご贔屓頂いた前田利家公のご逝去も見届け、思い残すこともなかったのだろう」

宗達　「恐れ入ります。叔父様とは祝言の時以来。
あの時は、舞まで見せていただいた」

光悦　「あれは北野宮大茶湯の頃。今となっては皆、懐かしい」

宗達　「京へはいつ」

光悦　「昨日着いたばかり。こちらの住まいの風通しも行き届き。
古い付き合いの、この紙師の宗二が、何かと手筈を」

宗二　「光悦様はこれよりご実家の上京の住まいにて、お仕事をなさいます」

宗達　「こちらへお戻りを」
光悦　「関ヶ原の大戦が終わり、国中、天下の行方に何かと騒がしい。
　芥のごとく流れる命、空しい戦にことさら萎えた」
宗二　「お父上亡き後、加賀、江戸よりもお仕えの御声がかかったが、いずれも従わず」
光悦　「我が家は代々、刀剣の研ぎ、目利きの家柄。武家にあらず。
　媚びへつらいは御免被る。
　何より本家を立てる旨こそが父よりの教え。
　ならば、この機に家業を控え、これよりは風流三昧。
　茶に書の道に身を捧げ、仏の慈悲に報いたい」
宗二　「こちらでは、茶の湯の師、古田織部様も近く」
光悦　「存分、物作りに精進出来よう。これもまた、法華の道に通ずることよ」
宗達　「上京のご実家なら、容易に行き来のできる先。喜多川、蓮池の親戚も喜びます」
光悦　「身内の行き来はかつての様に心安く。
　母、妙秀も、こちらの暮らしが忘れがたくてな」
宗達　「ええ。それはもう」

　女将、登場。

女将　「お前様、お前様。兄(あに)様が見えてるって。ああ、ホンに兄様ではございませんか」
光悦　「息災か」
女将　「ご覧の通り」
光悦　「従妹の中でもお前が一番丈夫であった。それで子は」
女将　「お陰様ですくすくと」
光悦　「女子であったな」
女将　「兄様がお見えで、何だって声をかけてくれないの。こんなところでお構いもせず」
宗達　「む」
女将　「相変わらずでしょ、家の人は。すぐにお茶の支度を。皆様は息災で」
宗達　「年初めに叔父様がお亡くなりに」
女将　「まあ。叔父様が。お知らせ頂いたなら加賀でもどこでも飛んで参りましたのに」
光悦　「気にせくことはない。万事、滞りなく済んだ」
女将　「お労しい。一昨年、うちの姉が亡くなったばかり」
光悦　「家内とお前は良い姉妹であったな。父上も何かにつけて可愛がっていた」
女将　「この野々村の家に嫁いでからも、よく気にかけて頂いて」
宗達　「お前、今から若いのを連れて上京のお屋敷まで行ってはどうだい」
女将　「本阿弥図子(ずし)へ」
宗達　「光悦様は京へお戻りになられる。ご一家お揃いで」
女将　「まあ、妙秀の叔母様も。何という吉報。それは急いで荷ほどきに」
光悦　「気遣い無用。相変わらずの仏道に精進。贅沢を嫌い、質素な暮らしは昔ながら。
　荷など僅か」
女将　「ええ、ええ。叔母様ならそうでしょうとも。でも、すぐにお顔を拝見したいの。

早速、用意を致しましょう。誰か、誰か。いいわ、やっぱり私が行く」
女将、退場。
宗達「無作法を」
光悦「家内、賑やかなことは何より。世間といえばまるで違う。
太閤殿下お亡くなりより僅か五年で、天下二分の状態。
ついこの間まで聚楽第に伏見の築城、茶会、花見と賑やか続きであったのに。
おごれるものも久しからず。真に世の常、無常の運命（さだめ）」
宗達「ひとえに風の前の塵に同じと申します。まさに春の世の夢」
光悦「なるほど夢か。夢ならその夢。見事咲く夢と見せてやらんか」
宗達「は」
宗二「先達て修復を終えた平家納経のお仕事。光悦様、直に拝見され、お褒めを」
光悦「厳島の宮に奉納された納経こそ平安の世の華よ。御仏の心映す鏡。美しゅうなり」
宗達「ご覧になって頂いておりましたとは。そうそうたるお歴々の仕事、間近で見られ、
これほど修練になりましたことは。お引き立て真に感謝を」
光悦「和歌したためる料紙下絵を初めて見た時、そのひらめきに目を引いた。
お前の筆のたちは稀な線を引く。
迷いなくかっ達に流れ、大きく伸びのある生きた線よ。
整うても、洗練されておるわけでもない。
しかし、生きた線は習うて叶うものでもまたなし。
この野太さは化けるかと、生かさで置くに忍びない」
宗達「わざわざお手紙頂戴した時には驚きました」
光悦「ただし、まだ雑味の多い特異の域よ。面白味も物足らぬ。
思うがままに野に放ち風に吹かせるだけでは、いずれ廃れて枯れる。
我は常々思う。
平安の世の装飾はある種、究極の頂点に達した。
白描、山水、大和絵の流れは、金泥、箔、雲母、五色に行きつき。
古の習いこそ無二の手本。それこそ唯一の師と仰げ。
それ故、納経の修復に加えること口添えした。
特に鹿、波、山の線、これらはこの先、お前について回るに違いない。
不同不二のひらめきがある。
精進しがいのあるものに巡り会えたは、この世の幸い」
宗達「肝に銘じます」
光悦「然りとて、かっ達のない生き方もまた無意味。
生涯は、御仏のご加護に任せ、塵と吹かれる身とあらば、
楽と戯れ、舞い踊り、駆け抜けてこそ我が人生。
謳歌するのもまたよしとせねば。
宗達、新しい時の世の始まり、我と創ってみる気はないか」
宗達「新しい時の世、でございますか」
宗二「光悦様は都にて新たなお仕事を進められる」

宗達　「新たな仕事」

光悦　「紙、筆、絵の具、螺鈿（らでん）に蒔絵、そして、絵や我が書に至るまで、
熟達の職人を揃え、究極の作々、世に出したい」

宗達　「究極の作々」

光悦　「この紙師の宗二ように、腕ある職人の数々、戦乱の世に行き場を失い、流れ行くありさま。家業手練の集まりも同じく。刀剣の拵えには、機の熟した匠の工が勢揃い。
新たに生かす道拓けば、見ごとに花開く」

宗二　「昨今、紙すきが奨励されて、今までと比べ物にならない程、料紙の出回る量も増えた。
更に技術は向上し、新たな試みも」

宗二、風呂敷の包みを開ける。

宗達　「おお、これは。何とも美しい間似合紙。砂子が刷り入れられて」

宗二　「色々と新しい材料を組み合わせ拵えてみた」

宗達　「何とも鮮やか。どれもきめが細かい」

宗二　「以前、お前様の描かれた短冊下絵もほら。
ここへ来るのに、光悦様が新たに和歌を乗せられた」

宗達　「ほう、それは」

宗達、短冊（白紙）を手に取り、黙る。

光悦　「匠の職人も、ただ集まるのではない。
手掛けるからには今まで誰も見たことのない、
己の感性貫いた、極上の品、極めたい。
新たな彩り、新たな表現、新たな息吹創り出す」

宗達　「新たな息吹…」

丑寅、庭より顔を出す。

丑寅　「親方よ。今から宿替えの人足だって。
飯はすぐきの菜っ葉に汁だけで、この家は人遣い荒えなあ（笑）」

女将、再び登場。

女将　「これ、どこうろちょろしてんの。また汚れるじゃないの」

丑寅　「へへへーん」

女将　「お前様、奥に支度をさせましたよ。
それじゃ私、行って参りますから」

光悦　「母もさぞ喜ぶ」

女将　「兄様、どうぞごゆっくり」

丑寅、女将、退場。

宗二　「どうにも一斉に賑やかな様子」

宗達　「（短冊を手に取ったまま）…」

宗二　「どうなされた」

宗達　「新しい試みのお話、私、ご一緒させて頂きます」

光悦　「やる気になったか。よう言うた。まさに春の世の夢の始まり」

光悦、笑いながら奥へ退場。

宗二、それに続く。
宗達、暫し短冊を見つめ、やがて、退場。
上下手、垂れ幕に映し出される。
（化城喩品（けじょうゆほん）見返絵）「槇、磯山、満ち潮」、
（願文　見返絵）「草を食む雌鹿」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。

（俵屋　茶室）
宗雪、公軌、登場。

公軌　「本阿弥光悦といえば、寛永の三筆と謳われた、能書の大家。
以前、茶の席で拝見する機会がございましたが、
あの見事な手は、感嘆するよりありませなんだ」

宗雪　「光悦様は親類の中でも親しい間柄。
父君の代で本阿弥家のご養子となり、その後、分家をなさりましたが、
親子共々、刀剣の目利き、研ぎは一流。常に多くの名品に囲まれ、
刀剣の拵えには自ら指示を。多くの職人を従えておりました」

公軌　「京に戻られてからは」

宗雪　「まさに花形。瞬く間にご帰京の噂が広まり、
武家、公家、商人を問わず、お誘い引く手あまた。
茶湯、歌詠み、能楽、特に書に至っては噂に高く、どなた様からも次々にせがまれ。
その都度、新たな試みの料紙をご所望されました」

公軌　「それでは宗達様も、さぞお忙しく」

宗雪　「忙しいことはこの上ないのですが、それよりも光悦様のご真贋見極め、それはそれは
厳しく。我々が持ち参じましても、お目に適い受け取られるのは、せいぜい十に一つ。
それ以外はすべて破棄捨て。五条と上京のお屋敷を何度行き来したか分かりません」

公軌　「ほう、それほどまで。聞きしに勝る審美眼」

丑寅、傘を持って登場。

丑寅　「そんなんじゃねえよ。あれはな、あのわがまま野郎に振り回されてただけだ」

宗雪　「お前、まだそんな所に。とっくに親父様の元へ戻ったとばかり」

丑寅　「すぐ行くよォ。こいつを親方の所へ持って行こうと思ったら、晴れ間がさして来やが
った。今日はおかしな日和だ、全く」

宗雪　「何だかんだと言い訳ばかり。それにその傘、どこかの置屋の。お前、やっぱり油を売
りに」

丑寅　「だから、今返しに行こうと戻って来たんじゃねえか」

宗雪　「（傘を取り）もういい。後で私が頭を下げに行ってくる」

丑寅　「詫びることなんてねえよ。可愛い丑寅ちゃんねと、姉さん方から渡されたたんだから
（腰かける）」

宗雪　「そらまたそんな所に」

丑寅「今の話が聞こえたら、途端に思い出してよ。
あの頃の親方、長い時間口もきかず、よくそこで難しい顔してた」
宗達、登場し、絵所に座り込む。
宗雪「次々と新しい下絵に考えを巡らせていたのだ。
絵に向き合う姿勢というか、気構えというか、
兎に角、あの時期、何かが大きく変わられた」
丑寅「お店の仕事そっちのけ、あの野郎のものばかりを描きまくってた」
宗雪「それだってほとんどが返って来る」
丑寅「そんでも、気落ちしてるわけじゃねえ。熱をもって相対してるっていうか」
宗雪「熱気だ。あれこそ静かな熱気」
丑寅「まとめて全部突っ返されてきた日なんて、かえって心に火がつくようだった」
宗雪「だからこそ、時にはそこでお気を静めて」
丑寅「あの頃からすでに、一人、勝負してたんだな」
公軌「勝負」
宗雪「長い長い競り合いの始まりですから」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
宗雪、公軌、退場。
丑寅「親方、昼寝かい」
宗達「阿保言え。考えてんだ」
丑寅「へえ。奥で女将さんが来て欲しいってよ」
宗達「…」
丑寅「すぐ来て欲しいと言ってましたぜ」
宗達「考えてんだ」
丑寅「あの光悦に渡す下絵かい。また今日も突っ返されたんだって。
どいつもこいつも、どうして皆、あんな高慢ちきに好かれようと。気が知れねえな」
宗達「ぬかせ節穴。ワシは光悦様が大の苦手だ。ずっと子供の時分からな」
丑寅「ホンとかい！そいつは初耳だな」
宗達「ワシとて、あの仕事の口煩さには辟易する思い」
丑寅「それでどうして引き受けたりなんか。知らん顔して打っちゃっておきゃ」
宗達「あの書を見せられたら、どうにも黙っていられねえ。
尻尾巻いて逃げるのと同じことになる」
丑寅「そんなに凄えもんかね、あんなミミズが這ったような字」
宗達「情感を抜いて見やがれ。
それにな、ワシが本当に参ったのはあの短冊よ」
丑寅「短冊。京へ戻って来た時のあれか。宗二のじじいが見せた」
宗達「あれはな、随分前に加賀へまとめて持ち帰ったもんだ。
いつも来る度、出来不出来に煩いもんで、どうにもこうにも腹が立ってな、
とうとう、文字の描けねえくらい画面一杯、でっかく下絵を乗せてやった。
ざまあみろって感じさ」
丑寅「面白え。そんならどうした」

宗達　「やられた」
丑寅　「やられた」
宗達　「惨敗だ。あれには全身、雷が落ちたぜ。
真上から堂々と和歌を書いちまうんだからな。
あんなに驚いたことはねえ。文字が生きてんだ。
沈んでもいねえ、気負いもねえ、あれは凄え」
丑寅　「なるほど、それで降参したわけか」
宗達　「阿保言え！この野郎」
丑寅　「おお、びっくりした。何だよ」
宗達　「誰が降参した。考えてんだ。
そっちがそう来るなら、こっちだって筆負けのしねえ、
いつ、どこで、どんな文字でも書きやがれって下絵をな。
だから、いつだって引き受けてんだ」
丑寅　「へえ、そういうもんかねえ。そんで、いいのか」
宗達　「何が」
丑寅　「女将さんが呼んでる」
宗達　「（素直に立ち上がり）すぐ行く」

宗雪、登場。

宗雪　「兄様、紙師の宗二さんが」
宗達　「何、来てるのか」
宗雪　「ええ。それが、大変に気分を害されておりますようで」
宗達　「どうした」
宗雪　「分かりません」
丑寅　「あの野郎はいつだって機嫌の悪そうな顔してやがんだ」
宗達　「光悦様の使いか」
宗雪　「さあ、それがはっきり」
宗達　「まあいい、すぐ通せ」
宗雪　「それが、もうこちらに」

宗二、荒々しく登場。

宗二　「宗達さん、宗達さんよ」
宗達　「まあ、こちらへ」
宗二　「一寸。聞いてくださいな。今度という今度はもう知らねえ」
宗達　「光悦様ですか」
宗二　「アテもな、少々のことならわがままも聞くぜ。
実際、今まで言われてきたことは何だって応えてきたつもりだ。
あんただっていつも無理難題、言われてなさるだろう」
宗達　「いえ、ワシは」
宗二　「いいんだ。分かってんだ。無理すんな言っちまえ。甘やかしちゃいけないんだ。あれは一寸した暴君だ」
丑寅　「暴君。そいつはいい」

宗達「茶の用意」
宗雪「ほら、こっち来い」
宗雪、丑寅を引っ張り、退場。
宗二「あの人、事ある度に、上下隔たりなく意見など出し合ってなんて聞こえに涼しいことを言うだろう。（顔をしかめて盛んに手を振り）何の何の、いつだってご自分の頭にあることだけを次々とご注文されたら、後はよろしく頼むと早々に引き上げなさる。こっちの考えなど聞く耳持たず、伝える暇もなし。
それでいて気に入らない代物でも持って行った日にゃ、持ち帰れの一点張りだ。あれで共にはないだろう。え、違うかい」
宗達「いや、まあ、それは」
宗二「それでもよ、そこは職人の意地。見事、要望応えてみせましょうと、日々精進しているところじゃねえか。それが、どうだい。古いとよ。アテの頭は固いんだと。降りますよ。アテは降ります」
宗達「まあまあ。一体、何が」
宗二「写本作りよ」
宗達「写本」
宗二「それも印刷っちゅう渡来もん。知ってるかい」
宗達「印刷…ですか」
宗二「一度、書いた書を、何度も使いまわして本をこさえるのよ。一度で沢山、同じものを」
宗達「一度で沢山…。ひらめきませんな。想像がつきません」
宗二「今までの写本なら、一文字一文字、書家が筆を走らせ、何日もかけて一冊を作ってた。ところが、印刷では文字を版で作って刷るだけだから、あっという間に出来ちまう」
宗達「文字を刷る。なるほど」
宗二「なるほどじゃねえ。これまでだって経文や五山本ならアテも知ってる。しかし、あれは仏の道を知らしめるもの。商売や目新しい贈り物にするためじゃねえ。第一、不精だろ。楽して数こさえようなんて根性も気に食わねえ。丹精込めて拵えた紙を、判でついた文字なんかじゃ心がこもらねえ。そう思わんかい。ましてや他の職人と相談しながら仕事しようなんざ、アテの性に合わん。そしたらどうだい、あのお方。何ともお前はお粗末な古狸、いつまでたっても田舎者の頑固じじいと、こう…。お前さん、今、笑ったか」
宗達「いいえ」
宗二「ホンとか」
宗達「ホンとです」
宗二「まあいいや。お前さん、角倉素庵を」
宗達「朱印船貿易で名を馳せる、嵯峨野、角倉家のご嫡男でございますな。あの大商家を都で知らぬものはおりません」
宗二「平家納経修復の折も、経文師を束ねた工房はあの家のもの。武家、寺社よりの信用も厚く、学にも秀でたお方らしいが」
宗達「はい。そのお話だけは」
宗二「光悦様に書の手ほどきをと所望され、ってを頼ってやって来た。

なるほど熱心。筋が良いので気に入られ、早速、弟子にされた。
それがどうだ、付き合いの日も浅いうちから、持ち込まれた話にのめり込み、
あの男も今、新しい試みに並々ならぬ興味を示しておる、とこう来た。
これからは、今までとは比べ物にならんほど、紙すきの数が必要になる。
まあやってみよ。古狸の古い頭も、やがてその値打ちが分かるだろう…。
お前さん、やっぱり今、笑ったな」

宗達「いいえ。ホンとですって」

宗二「擦り物は長く世に残る。遠い世の者が手にする機会もある。
最高の品を最高の形で世に残せ。
新しいものに胸躍らせて道拓けば、いずれ境地に辿り着く…と、こうだ」

宗達「新しいものに胸躍らせ」

宗二「心宿る書家のためなら、アテはいくらでも紙を漉く。
ところが、それが古い、視野が狭いとそう言われちゃよお」

宗達「それで、どうされたのです」

宗二「仕方ない。どうにも押し切られて、
そこまで仰るのなら、行くだけ行ってみましょうと出てきた。
いつもの調子で笑ってたよ。それでよい、それで。ホッ、ホッ、ホッ。
明日の晩、角倉の家で皆が集まる。
職人全部が一同に集まり、意見を出し合い進めようというのだ。
お前さんにも声が掛かってる」

宗達「ワシですか」

宗二「光悦様は端からそのつもりだよ。素庵もな。
いいか、アテはお前さんを信用してる。結託だ」

宗達「結託」

宗二「同じ仕事をした職人同士、足並み揃えるんだ。裏切んなよ」

宗達「裏切るって」

宗二「行くだけ行って断りゃいいから」

宗達「行くんですか」

宗二「行かなきゃ仕様があるまい。義理もたたねえ」

宗達「はあ」

宗二「嫌なのか」

宗達「いえ」

宗二「突っぱねりゃいいから。断っちまえばいいんだ。
兎に角、明日、迎えが来る。嵯峨野で落ち合おう」

宗達「分かりました」

宗二「(立ち上がり)よし、出来た。邪魔したな」

宗達「もうお帰りで」

宗二「年寄りは気が短くていけねえ。くれぐれも宗達さん、裏切んなよ」

宗二、退場。

暗転。

（嵯峨野・角倉家　一六〇五年）
奥から船頭唄と手拍子、聞こえる。
賑やかな歓声、やがて収まる。
宗達、縁側にて、一人たたずむ。
角倉素庵、登場。

素庵　「野々村様。野々村宗達様では」
宗達　「はい。宗達にございます」
素庵　「如何なされた。このような所で」
宗達　「少々、酒が入りましたので、風に当たろうと」
素庵　「そうでしたか。おそらく父が無理に勧めたのでしょう。
父は機嫌がよくなると盛んに注いで回るのです。どうぞご無理なさらず」
宗達　「父上」
素庵　「（丁寧に手をつき）角倉素庵にございます。
光悦様のお伴で出ておりましたが、まだしばらく戻られません」
宗達　「これは、素庵様。お初にお目にかかります」
素庵　「いえいえ、どうぞお楽に。お楽に。
宗達様のお仕事ぶりにはいつも感銘をいたしております。
私たちは年も近く。どうぞ、素庵と名で呼んでやってください」
宗達　「それはありがたい」
素庵　「時に、何をご覧に」
宗達　「ええ、月をね。一寸」
素庵　「なるほど、今夜はまばゆいばかり」
宗達　「それに、庭の奥でからまる蔦が、ほのかに照らされ」
素庵　「蔦でございますか」
宗達　「ワシは、あのつる草の姿形が好きでして。伊勢物語を思い出す」
素庵　「なるほど、東下りの段ですな。何を隠そう私も伊勢物語は大好きで」
宗達　「おう、それは」
素庵　「かえる波、ゆく蛍に芥川」
宗達　「絵になるところが多ございます。山、峠道、月、草花」
素庵　「実は、それらもいずれ本にしたいと」
宗達　「物語を本に。例の印刷で」
素庵　「そうです。まずは献上の品に相応しいものをと考えておりますが、
技術が進めば、やがて数や量が揃います。
そうすれば今まで本に触れたことのない人々にも、読む楽しみというものが生まれる」
宗達　「今まで本に触れたことのない人」
素庵　「知識や教養というものは、限られた者だけが抱え込むものではありません。
物語、和歌、謡曲、これらは国の宝です。誰もが親しみ、語り継ぐものでなければ。
私は学問を知り、人生を豊かに出来た。今こそ、多くの人がその素晴らしさを知る時」

奥で職人たちの賑やかなはやし声と手拍子始まる。

素庵「父は学問を嫌います。男子一生の道にあらずと。
次々に新しい事業を始め、自ら率先して先頭に立ちます。それが生きがいなのです」

宗達「それでは、お父上は出版にご興味が」

素庵「ありません。父の機嫌がいいのは、私が新しい事業に参加することを約束したから」

宗達「新しい事業」

素庵「角倉家は、幕府より許可を受け、大堰川の土木工事を始めます。
年が明けたら自ら現場に入り、河川を切り開いた後、水運業へ」

宗達「自ら土木工事を」

素庵「だから、私は交換条件をつけました。
貿易船の商いを引き継ぐこと。それにより、家に益々の繁栄をもたらす。
もちろん河川工事も手伝います。我が身にかけ、それを約束する。
その代わり、この出版の事業を進めること、認めてもらいたい。
工事の日取りまで、まだ日がある。その前に何としても、本を一冊。
名に恥じぬ絢爛たるものを仕上げて、世に出したいと」

奥で職人たちの賑やかに手を叩き合う音。

素庵「それに、朱印船は印刷の技術を知る絶好の機会です。
安南（あんなん）、呂宋（るそん）、天川（あまかわ）、特に朝鮮、明国の技術は大変に素晴らしい。
実際、この目でその手立てを知れば、大きく前進致しましょう。
如何です。興味をお持ちになられましょうや」

宗達「ええ、もちろん。あ…いや」

素庵「意に添われませんか」

宗達「いえ、決して。しかし…」

宗二、登場。

宗二「宗達さん、宗達さんよ」

宗達「こちらです。宗二さん、大分と酒が入られましたな」

宗二「いやあ、つい誘われるまま。角倉了以というお方、豪快極まりない」

宗達「こちらは角倉のご嫡男」

素庵「（丁寧に手をつき）素庵にございます。光悦様がお分けくださり、
いつも宗二様のご料紙、有難く使わせて頂いております」

宗二「いよう、これはお初に。そうですか。あなたでしたか」

素庵「此度は色々とお骨折り頂きまして」

宗二「先程から、書生の宋充さんて方から色々、ご説明頂いておりました。
細かい所までは分からん部分もあるにはあるが、大方は予想した通り。
（頭を指し）しっかりここに入ってございます」

宗達「いけないな…宗二さん。少し酔いがあるようだ」

宗二「いやねえな。あるわけがねえ」

素庵「それはよろしゅうございました。如何です。お力添い頂けますでしょうか」

宗二「万事、謹んでお引き受け致します」

宗達　「…」
素庵　「それは有り難い」
宗二　「様々なお話を伺い、深く感銘。先を見通したお考えに感服つかまつった。
心配ご無用。この宗達さんも嫌とは言わせぬ。な、そうだよな。（宗達を見て）何」
宗達　「いえ」
宗二　「酒が入った勢いで言うんじゃない。話を聞いて大いに合点がいった」
素庵　「ええ」
宗二　「間違いない。出版は、これまでの写本のあり方を一新する。
皆が寄ってたかって新しいもんを作ろうという時に、食わず嫌いはいけませんよ」
素庵　「その通り」
宗二　「いいか、書くのは一度きりには違いないが、それだからといって、不精とは違うんだ。
彫り師、摺り師にしたって、楽するための道具職人とは訳が違う。
新しいもの、優れた技術は広く世間様の役に立つ。分かるな」
宗達　「ええ」
宗二　「これからの時代、職人も変わらにゃ。熟練の匠が手に手を取って。
すたれるものは進みのない物。アテは嫌だね。置いてけぼり食うなんてことは」
素庵　「まさに。光悦様もいつもその様に仰り」
宗二　「そこ、それだ。流石、先見の明がある」
素庵　「様々なお知恵を拝借するばかりか、ご本人自ら、奔走頂いております」
宗二　「慈悲なんだ、あの方のやられることはみんな。言うこと成すこと、徳のある。なあ」
宗達　「左様で」

宗充、登場。

宗充　「宗二様、宗二様」
宗二　「おお、こちらに。こちらですよ、宗充さん」
宗充　「安堵しました。部屋を出られてしばらく戻られませんので」
宗二　「案ずるなかれ。アテは逃げも隠れも」
宗充　「宗達様もこちらに。先生、お戻りで」
素庵　「うん。今、そちらに行こうとしていたところだ」
宗二　「よし、それじゃ、仕切り直しだ。皆で顔つき合わせて相談を。
まずは何から。アテの頭はもう働き始めておりますよ」
素庵　「隆達節を考えております」
宗二　「あの流行り歌の」
素庵　「そうです。数あるあの歌を一冊にまとめて献上しようと」
宗二　「ああいうものをまとめて手元に。なるほどそれは重宝する。考えもつかなんだ」
素庵　「小唄、和歌、、謡曲と、いずれは多くの人が喜びそうなものを。
出版の技術はそれを可能にします」
宗二　「そうです。可能にします」
宗充　「では、始めましょう。そろそろお部屋に」
宗二　「しかし、素庵さん。いいですか、一つ」
素庵　「何でしょう」

宗二　「職人として言わせてもらえりゃ、これだけは。こいつは譲れねえ」
宗達　「宗二さん」
素庵　「仰って下さい。何なりと」
宗二　「アテが今、お約束出来るのは一度きりとさせて頂きましょう。
まず一つこしらえて、納得がいくものかどうか、じっくり拝見したいものだ。
いいですか。一度ですよ。一度きり。納得いかなきゃ、そこで終い」
素庵　「結構です。まずは一冊。きっと気に入って頂けます」
宗二　「よし、出来た。いいな、宗達さん。お前さんもこれで文句はないだろう」
宗達　「ええ、はい」
宗二　「では、参りましょう」
素庵　「宗二さん、肩を」
宗二　「大丈夫、大丈夫、とっくに酒はぬけとりますから」
宗二、おぼつかなく奥へ進み行く。
一同、退場。
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
上下手、垂れ幕、嵯峨本の数々、映し出される。

（俵屋　茶室）
遠くで雷のゴロゴロいう音。
宗雪、公軌、登場。
公軌　「嵯峨野、角倉家の出版といえば嵯峨本と呼ばれたものでしょう。
世に名だたる品と、名家こぞって手に入れようとしたもの。
それだけ熱を持った職人が集まり、作っておられたとは。
中でも紙師宗二と言えば、今では名高い職人だが、
こういう所でも物事の始めには、ちゃんと名を連ねて。
たとえ、それがたった一度きりの仕事でも」
宗雪　「いいえ。結局、あの方は、その後、何冊も本を作りました。作る度に上機嫌で。
最後は染色の技術を取り入れ、鮮やかな色彩紙まで世に出して」
公軌　「（笑）それはどうも」
宗雪　「嵯峨本は大変な評判となりましたが、
それ以上に、あらゆる分野の職人が一堂に介せたことが何より大きい」
公軌　「なるほど。ここでもやはり本阿弥光悦の力」
宗雪　「これで親父様とは切っても切れぬ仲に。あの頃が一番多く一緒に仕事をした時期でしょう。和歌の色紙や短冊など、それは多くの様式を生み出し。
時代にも後押しされました。都には人が集まり、商人や町衆の繋がりも広がって」
公軌　「あの頃は都中、活気づいた、真にいい時代」
宗雪　「その後、世の中が一変するなど…考えも」
公軌　「そうでしたな…。束の間と終わってしまった」
宗雪　「間もなく、大坂で二つの陣がはじまり…」

遠くで雷のゴロゴロいう音。
丑寅、駆け込んで来る。
丑寅「おおい、今の聞こえたか」
宗雪「また戻って来た」
丑寅「（空を見て）だって、ほら、あの黒い雲。先刻の傘どうした」
宗雪「もうとっくに誰かが返しに行ったろう」
丑寅「何だ、気が利かねえ。だったら、もう一遍」
宗雪「こら、どうしてまた行く。持つなら家のを持って行け」
丑寅「分かったよ。一々、煩せえ」
丑寅、退場。
公軌「戦などというものは、我らにとってはいつも空しいだけ。中でもあれはホンに無残な」
宗雪「あの頃、都に集まる兵がみるみる増えて、うろたえるばかりの人々。
早や早やと荷をまとめて逃げ出す者さえ」
公軌「家康公が大軍を率いて伏見に入られる頃にはもう、恐ろしいことが始まると皆が予感
した。どうぞ大戦だけはお避けてくださいませと、手を合わせて祈っていたものだが」
宗雪「それも叶わず…。
寒い冬のある朝、突然、素庵様が訪ねて来られました」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
素庵、作業着姿で登場。
素庵「宗達。宗達さんいるかい」
宗達、登場。
宗達「これは。素庵じゃないか。何事だ、こんな早く」
素庵「内々に知らせておきたいことが。他に聞かれるとまずい」
宗達「知らせておきたいこと」
素庵「実は、家康公のご命により、これから私は淀川の流れをせき止める土木工事に向かう」
宗達「淀川の流れを止めるだって」
素庵「とうとう戦が。すでに相当な数の兵が、大坂を取り囲む準備を始めている。
工事はひと月。終わればすぐに他の川もせき止め、そうして、大坂城の外堀はすべて
埋められる。それにも私たちは駆り出されるだろう」
宗達「どうなるのだ、一体」
素庵「政は分からんが、豊臣方が抵抗して応戦を始めれば、大戦は間違いない。
そうなれば、この都にも人が流れ込み、ただでは済まぬだろう。
くれぐれも用心だけはしておくように」
宗達「それを言いにわざわざ」
素庵「何、ここは私たちの通り道。五条の橋に船を止めて来ただけだ。
まさか自分の作った水路で、戦の準備に駆り出されるとは思わなんだよ」
宗達「それで、出立は」
素庵「すぐに、火急のお勤めということだから。逆らえば家など簡単につぶされる。
朱印船に水運業と、徳川様の息が掛かり、家も妙な事に首を突っ込んだ。
ああ、戦が終わったら、また本を作りたいな。私たちは物作りこそが本分なのだから」

宗達「そうだな。またやろう、きっと」
素庵「さらば。どうか達者で」
宗達「お互いな」
素庵、退場。
宗達、見送る。
宗雪「その年の暮、戦は一旦、収まりましたが、
素庵様の仰る通り、翌年には、徳川の大群が都に集結して。
総勢数十万の兵が行き交い、大坂は火の海。
京の町の高台からは、空に上がる炎の雲が見えたほど。
あらゆる噂が都中を飛び交いました」
遠くで雷のゴロゴロいう音。
宗雪「その日、光悦様はふらりと現れ」
奥から琴の音、聞こえ出す。
丑寅、駆け抜けていく。
丑寅「風だァ。風が出てきたぞォ」
光悦、登場。
宗達、静かに迎える。
光悦「風の吹く。
時というものは、忽ちに過ぎて刹那にも止まらず、
延々と続く川の流れよ。
移ろう時を縁起と見れば、皆、脈々と続く。

時はひと時、生死往生繰り返し、
絶え間なく続く雲の流れよ。
地に生まれ、空に消え、やがてまた生まれる。

人の世は束の間の淡き夕暮れ、
無常の世の儚い風の花びら、
ゆらりゆらりと運命の舞い。
過ぎ去るものを流れ見ては移ろい行き、いつしか終わる…。

詠み人知らずのこんな漢詩を、昔、旅の空で聞いた。
今川家出陣を見送る折、兵の一人から。
それが室町幕府、最後の夜となった。
自ら研ぎを行い極めた時代、
目利きした刀剣は、縁次第で敵味方いずこにも渡る。
その刀は、やがて織田家に渡り、お褒めの言葉頂いた。
己の業、逃れようとも空しく。
間。
物作る者は、行く日すべてに無心で精進。

私欲を跳ね除け、その腕鍛えて初めて見事な光放つ。
気の充実、繰り返し、これまでの精進決して嘘はつかん。
宗達、
満を持して機を得たな。
高みへと上がるその門、今、目の前で開かれる時。
我の言う意味分かるか」
琴の音、聞こえる。

光悦「あれは」
宗達「うちのが。気を落ち着けたい時など、時折」
光悦「まだ続けていたか。あれもこれだけは才の秀でる」
間。
光悦「室町の時を終え、桃山の世も終わりを遂げた昨今、
公家の暮らしの惨憺たるや目を覆う。
和歌に書、物語ほどこの国に、深く根づき向上したものはない。
卓越したこれら教養の積み重ね、このまま廃れさせては今生の罪。
角倉の製本にて、一先ず面目は果たせたが、
本来、それらは神仏に捧げることこそ本道。
舞、楽（がく）、和歌、書、絵にしても然り。
出会い、喜び、無常、惜別。過ぎ来し方を振り返り、時の移ろいを描きたい」
宗達「しかし、私は未だ未熟。奉納などということは」
光悦「お前が絵描きならば、終生、その腕止まることなく、
見えぬ何者かをその絵筆にとどめよう。
物生み出すということは、覚悟と楽の表裏一体。
内なるもの、その手に取り出し、高みを夢見て、無我の境地に至る。
為すことを只今、為せ。時は止まらん」
丑寅、駆け抜けていく。
丑寅「風だァ。風が出て来やがったァ」
宗達「よございます。やりましょう」
光悦「よう言うた」
光悦、懐より白紙の巻物を転がし広げる。
光悦「ならば、和歌書きつづる下絵を」
光悦、謡い舞い始める。
光悦と宗達、そのまま奥へと進み退場。
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
琴の音、調子が上がっていく。

（俵屋　絵所　一六一五年）
宗雪、公軌、登場。

上手から下手へ進んでいく。

宗雪　「それが、豊臣家の最後の日であったそうです。
大坂城は無残に焼け落ち、逃げ惑う人々が京まで雪崩れ込んで」

公軌　「光悦様は何事かご存じで」

宗雪　「大坂での酷い有様、多くを耳にしておられた様子。
お知り合いの武将とも、それぞれに複雑な関わり合いも」

公軌　「そんな最中にお二人は物作りを」

宗雪　「そういう時だからこそ。二人の背中が有り有りとそれを物語っておりました。
奥にこもり、幾日もかけ、和歌を読み出し、書きつづり、
下絵が気に入らぬ時には、その場で破り、また別へ。
お互い気の済むまで延々と繰り返され、最後に残ったのは僅かに数点」

公軌　「数点」

宗雪　「その絵は、時の世情とはまるで関わりのない、厳かで安らかな精神世界。
四季、年月、無常、生涯。
時の移ろいを描きながら、しかし、まるで静かに時を止めたかのよう。
おそらく、今まで誰も見たことのない下絵と書の姿」

宗雪、足を止めて振り返り。

宗二、登場。

公軌、退場していく。

宗二　「宗雪！」

宗雪　「（振り返り）宗二さん」

宗二　「光悦様は」

宗雪　「兄様と奥へ入ったまま」

宗二　「こいつで最後だ」

宗雪　「巻き物紙。こんなに」

宗二　「家にあるありったけを持って来た。しかし、もうこれ以上は。
材料をかき集めようにも、川も道もみんな封鎖だ。（奥を顎で）何を始めてる」

宗雪　「奉納和歌のようです」

宗二　「奉納。なるほど」

宗雪　「いつもとまるで様子が違う」

宗二　「だろうな」

宗雪　「一体、何が」

宗二　「光悦様は今、家康公より再三、登城致せよとのお達しを」

宗雪　「家康公から」

宗二　「しかし、いずれも打ちやっておる」

宗雪　「何故です」

宗二　「伺えば、首切られることもあると見ている」

宗雪　「まさか…！」

宗二　「古くからお付き合いの茶屋四郎次郎様が間に入られ、
執り成しこそ行ってはいるが、いずれ何より沙汰があろう。

されど、あの方それを聞いてもお構いなし。
吉と出ても凶と出ても、すでに覚悟が出来ている」
宗雪「そんな」
宗二「もとよりあの方は、死を恐れていない。
戦で斬り合う刀剣家業を生業としている以上、
業を背負うておられること、肝に銘じておられる。
法華の道に精進され、行を貫くのはそのため。
本阿弥家と言えば、加賀、徳川からも家禄を与えられ、
刀剣目利き、書に工芸と富には事欠かぬ。
それが飯炊き、小間使いの他、決して家には置かず、暮らしは極めて質素。
実入りはすべて寺や人に寄進してしまう。
それも皆、御仏に生涯を捧げる決心の表れ。
ご自分の真贋を加護と疑わず、身を捧げて、今生お返しする考え」
宗雪「それではこれは。光悦様の…」
光悦、上機嫌で登場。
光悦「宗二か」
宗二「はい」
光悦「遅い」
宗二「はい」
光悦「早う来て手伝え。宗雪、お前も」
宗雪「私も」
光悦「いよいよ本域始めるぞ。二人、歌詠め」
宗二「(巻き物を差し出し) 光悦様！」
巻き物が縦横無尽に広げられていく。
琴の音、激しい響きで再び聞こえる。
丑寅、駆け抜けて通り過ぎる。
丑寅「風だァ。風が出てきたぞォ」
宗達、筆を持ち、息も荒く登場。
光悦「宗達、準備は」
宗達「整いました」
光悦、謡い、舞、始める。
宗達、絵 (墨なし、白紙) を描き始める。
光悦、絵の上に筆 (墨なし) を進める。
宗雪「それは凄まじい勢いで始まりました。
下書き無し、輪郭線もなし、
迷うことなく一気に書き進められ。
描かれる絵は金銀泥のみ。
描く季節や時が流れるのと同じに、
紙の上で妖しく光りを放つのです。
書き流れていく光悦様の手から先人の歌の数々。

和歌の一首一首が踊り出すかのよう」
宗二、宗雪、交互に和歌を読み上げる。
光悦「面白い。もっと大胆に。いらぬものはすべて省け」
次々とパネル、垂れ幕に映し出される和歌巻の部分絵。
「四季草花図下絵古今集和歌巻」
宗達「朝霧の中に立つ群れの化身、
時、移ろいはこの世の無常を表す。
季節に咲き、雨に散り、風に乗りて、また花開く。
過ぎ行く時の中で、移ろう時に身をゆだねても、
生死のつながり、魂の泉。
神仏に問え。
群れを成して咲き乱れる先には、
やがて、いつしか風に舞う無常の光景」
宗達、筆を止め、光悦に叫ぶ。
宗達「光悦様！」
光悦「どうした」
宗達「遠慮は無しにしてもらいましょう」
光悦「何と」
宗達「物足りません！描く下絵にご配慮無用。書を乗せていただきましょう」
光悦「（笑）これは。よう言うた。よう言うた」
宗達「次を」
光悦「ならば、和歌の奉納には、紀州玉津島の社、三十六歌仙。
『和歌の浦に　潮満ち来れば　潟（かた）を無（な）み　葦（あし）辺をさして　鶴（たづ）鳴き渡る』
山部赤人の句にちなみ、和歌浦の海を描け」
宗達「面白い。ならば磯に発つ鶴の群れを。巻き物すべてに鶴だけを」
光悦「やれるか」
宗達「もう浮かんでおります」
宗達、再び筆の動き、始まる。
光悦、再び、謡い舞う。
琴の音、盛り上がっていく。
光悦「二人！歌え。歌え」
三十六歌仙。左方を宗雪、右方を宗二、交互に詠み合う。
宗達「和歌浦の磯はきらびやかに輝くと伝え聞く。
州浜で休める鶴の群れ。
動き出すきっかけはほんの一瞬。
寄せる満ち潮に、羽を広げて。
飛翔の群れは波を渡り、一群となって連なる姿。
潮は上がり、風は吹き。
群れは高々と舞い上がり、雲をも上がる。

やがて干潟を見つけ舞い降りる者、
弧を描き、後続に知らせる者、
大群の鶴の舞。時の流れは、生涯そのもの」
丑寅　丑寅が駆け抜けていく。
「風が止んだぞォ。あそこに！晴れの光が差して来やがった」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
琴の音、激しく響く。
次々とパネル、垂れ幕に映し出される「鶴図下絵三十六歌仙和歌巻」断片の数々。
宗達「おおよ！連なる姿に心奪われ、命が躍る。
様々な景色が流れては、幻のように過ぎて行き、また現れる。
絵筆持つ手に喜びが漲り、血の流れに熱を持つ。
ワシはこれまで、これほどの高揚を味わったことがない。
これか。これが神仏の領域か。
ワシは今、その風に乗ったか。
いいやまだまだ、その先、光の向こう。
手を伸ばせ、見えぬその先」
光悦の筆、流れるように、謡、盛り上がる。
歌い続ける和歌。
琴の音、最高潮に。
宗達「つかめよう、光の先。
まだ見えぬ、その世界が。
まだ見えぬ、その世界が」
歌詠み、終了。
能舞、終了。
全パネルに映し出されて止まる「鶴図下絵三十六歌仙和歌巻」。
琴の音、ＯＵＴ。
光悦「（高らかに笑）ほっ、ほっ、ほっ、ゝ」
三十六歌仙の群鶴が一斉に羽ばたく大きな音。
長い羽音の中で、光悦と宗二が静かに退場していく。
丑寅、駆けこんで来る。
丑寅「光悦の野郎が！家康公の命により、洛外の北、鷹ヶ峯に移されるってよ！」
宗達、じっと前方を見つめる。
照明、ゆっくりとＯＵＴしていく。
暗転。

※（２）※

（俵屋　座敷　一六二五年）

遠くで正月囃子、聞こえる。

女将　「お陰様を持ちまして、当家、野々村は、屋号俵屋と改め、商いを広げていくことに相成りましてございます。重ねてこれよりは、親族である宗雪が当家主。すでに我が家へ入り、娘と祝言を挙げて早や五年、絵屋の看板を引き継ぎまして、この度、若棟梁を務めさせていただくこととなりました。皆々様におかれましては、これまで同様ご愛顧頂きますよう、謹んで御願い申し上げ奉ります」

女将、お辞儀し、退場。

照明、ＣＨＡＮＧＥ。

（五条・鴨川の畔）

丑寅、両手に扇（白紙）を持って、舞台前方に登場。

宗見、宗運、利慶、慶春の新人、兄弟弟子が続いて登場。

正月囃子、やがて消えて。

丑寅　「扇だ！扇だ！俵屋の扇でござい。ご贈答、京の土産に俵屋の、絵扇持たねば始まらぬ」

宗見　「祇園詣でに清水参り、四条、五条、六波羅の、お出でましたる旅の思い出」

宗運　「檜扇から夏扇まで一揃え、お祝いにて一枚は欲しいもの」

利慶　「ご立派な殿方には勇ましく保元・平治の物語」

慶春　「ご婦人方におかれては、源氏物語。特に夕顔の段などよろしかろう」

丑寅　「俵屋の絵扇は、金銀をふんだんに使い、どれも上等きらびやか。只今、都五条では、花盛り、花盛り」

宗雪、登場。

宗雪　「おい、この忙しいのにどこほっつき歩いてる」

丑寅　「この都の盛況を見てみろ。大坂の陣が終わってからこっち、物騒な時代は様変わりして、皆、町に繰り出し、物見遊山。こいつを逃す手はねえと、俺たちはあちこち宣伝して歩いてんじゃねえか」

宗雪　「嘘をつけ。大方、四条の河原物でも見物して来たんだろう。変わり踊りの一座が旅から戻って、評判だと聞いてる」

丑寅　「宗見、宗運、利慶、慶春！お前ェら話したのか」

兄弟弟子「（慌てて）いえ、いえ、いえ」

丑寅　「言っとくが俺はな、（踊りの恰好）あんなもんに歌舞れちゃいねえ」

宗雪　「はまり切ってるじゃないか」

丑寅　「近頃の新人は口が軽いぜ。まあいい、お前たち先に工房へ戻ってな」

兄弟弟子「へーい」

兄弟弟子、退場。

丑寅　「（反対方向に行こうとして）そら、しっかり働け」

宗雪　「お前も戻れ」

丑寅　「俺は、一寸」

宗雪　「工房がどれだけ忙しいと思ってる。次から次の注文で、店先から人の列が絶えることがない。

お陰でお店も大きくした。親戚をかき集めて職人も増やした。
古株のお前がそんな風じゃ、他の者にも示しがつかん」
丑寅「そりゃ、俺だって張り切りたいところだが、どうにも力が入らねえ」
宗雪「またそんなこと」
丑寅「だってよォ、家にいたってつまらねえもの」
宗雪「何がつまらない」
丑寅「だってそうじゃねえか。肝心要の親方がすっかり生気をなくしちまってちゃ。
いくら大旦那に収まったからってよ、一日ほとんど奥の絵所で、
（描いては投げ捨てる物まね）ハア…フウ…こんな感じ。
代替わりの挨拶すらおっくうで、女将さんに押し付ける始末だ」
宗雪「分かってるさ、そんなこと。光悦様が鷹ヶ峯に移られてからこっち、親父様はすっかり張りを失くされ」
丑寅「光悦、光悦って、どいつもこいつも。
大体なんだ。鶴の下絵に書きゃあがった、あの歌の文字は。
墨継ぎのたんび、きどった線を上下に揺らして、ゆらありゆらり。
第一、書き損じは多いし、書き忘れの歌までありやがる。
しかも、後で気づいて書き足してんだ。
最初見たときは酔っぱらって書いたのかと思ったね。
あんなのに気落ちするこたあねえ」
宗雪「そう思ってるなら親父様があんな風に悶々としているものか。
あの巻物の文字はどれ一つ浮いてはおらん。下絵を邪魔してもおらん。
気遣いや配慮は承知の上、更にその上を行かれておる。
文字の大小で調子を取り、書と絵を互いに調和させて。
間違いの箇所にしても、隠そうともせずありのままだ。
それがちっとも浮いたりしないのは、あの方の書の高みを物語ってる。
要するに自然に在るのだ。親父様はそれを感じておられる」
丑寅「いなくなってそんなに傷心するくらいなら、もう一度、こっちから乗り込んで、
取っ組み合って仕事してみりゃいいじゃねえか」
宗雪「そう簡単に出来れば世話はない」
丑寅「どうしてだよ」
宗雪「あの方の茶の湯の師匠、古田織部様がどうなったかくらい、お前も知ってるだろう。
大坂の陣で謀反のご嫌疑をかけられ、ご切腹。光悦様は門弟の中でも最も近しい一人。
しかも、その気骨までも受け継いだともっぱらの評判だ。家康公から鷹ヶ峯の地を拝
領したのは、所払いの意味合いがあること、誰の目にも明らかだろう。
古いお付き合いのある、茶屋四郎次郎様のお執り成しがなければ、今よりずっと重い
ご沙汰もあったのだ」
丑寅「ふん、茶屋四郎次郎だなんて、そんな二人分の名前を一つにくっつけたような奴」
宗雪「茶屋様といえば天下の豪商。今では徳川家、側近の一人にまで数えられる。そういう
お方から光悦様は守られ、お目付役という形で、鷹ヶ峯に家まで構えてお出入りをさ
れておる。他所の者がおいそれと近づけば、かえって光悦様にご不興を招く恐れがあ

るやもと、皆、ぐっとこらえて遠慮しているのだ」
丑寅「しかしなあ」
宗雪「それに親父様は工房を離れたわけじゃない。
親父様ご指定の扇や、屏風絵の注文は、これまで以上に増えてる。
隠居は、それに専念するため。商いは任せて、絵に没頭したいというお考えだ。
親父様は歩みなど止めてはおらん。それどころか、新しい試みに考えを巡らせて。
お前もちっとは自分の仕事に精出せ。新人たちに先を越されるぞ」
丑寅「仕様がねえ。そんなら、ぐるりと置屋巡りでもしたら戻るとしよう」
宗雪「それがいかんというのだ」

紙師宗二、登場。
旅の荷を背負い、物陰から静かに姿を見せる。

宗雪「おお、これは」
丑寅「紙師の宗二。お前ェ、こんなところで何を」
宗二「(手に持った包みを上げ) 見て分からんのか、腹ごしらえだ。
鴨川のほとりで一服するのが、都にいた時からアテの習わし」
丑寅「久方ぶりだな。急に現れたんでびっくりするじゃねえか」
宗二「寄るな、飯が不味くなる。相変わらずの不細工め」
丑寅「何を。人の面を言えた義理か」
宗雪「よく来られましたな、鷹ヶ峯から」
宗二「洛中には行き来もする。本法寺は本阿弥家の菩提寺、本家もそのまま本阿弥辻子に。
様々な噂が飛び交ってるらしいが、亡くなられた家康公と光悦様は、子供時分から旧
知の仲、ちっ居は形だけに過ぎぬ。でなければ、いくら奥深い山の中とはいえ、あれ
だけの広大な領地をおいそれと与えるものか」
丑寅「まあ、それも一理あるかもしれんが」
宗雪「いつこちらへ」
宗二「一昨日。此度は、光悦様が自ら作庭された菩提寺の手入れを」
宗雪「そういえば、そろそろ母上様のご命日」
宗二「妙秀様は本阿弥家で誰よりも影響のある母人。葬儀の折は村中総出で悲しみにくれた」
宗雪「光悦様は、その後ご健勝で」
宗二「それが一時、中風の病にて利き手が不自由になられてな」
丑寅「あの野郎が」
宗二「ところが、一念発起。常日頃から精進に徹し、朝な夕なと、熱心に読経を上げられる
以外は、震える手にて刀剣の居合いの外、杖で山道を歩き、畑で鍬も振るわれた。
残りは職人を従えての風流三昧。茶の湯を楽しみ、能を舞い、近頃では作陶も始めら
れ、茶碗作りに没頭しておられる。そうして半年のうちにはほとんど元に戻られた」
宗雪「半年で」
丑寅「流石にしぶとい」
宗二「御仏のお慈悲だ」
宗雪「さあ、こちらまで来て素通りはありますまい。どうぞ家へ」
宗二「折角だがこれで。お言いつけの用事も終えた。今日のうちには鷹ヶ峯に戻りたい」

宗雪　「左様ですか」
丑寅　「何だよ。飯食うんじゃなかったのか」
宗二　「お前のまずい顔を見て腹の虫も萎えた。歩く道すがら綺麗な景色の下でまた広げよう」
丑寅　「へん、相変わらずの憎まれ口。言うことがいちいち癇に障る」
宗二　「宗達様には、くれぐれもお仕事にご精進下さいませと」
宗雪　「光悦様も、ご健勝くださいますように」
宗二　「御免」

宗二、退場。

丑寅　「可愛くないねえ」
宗雪　「よく言う。懐かしい顔を見て、頬が緩んでいるじゃないか」
丑寅　「阿保言え、あんな仏頂面」
宗雪　「さあ、我々も帰るぞ。いつまでも、お前の油売りに付き合っておられん」
丑寅　「仕方ねえ、ひと仕事おっぱじめっか」

慶春、再び登場。

慶春　「旦那様ァ」
丑寅　「何だ、戻って来やがった」
宗雪　「どうした」
慶春　「はい、あの、大旦那様がお探しで」
宗雪　「出先から戻られたのか」
慶春　「ええ。たった、今」

宗達、登場。

宗達　「宗雪、大急ぎで新しい絵の具と筆を取り寄せろ。ありったけな」
宗雪　「ありったけでございますか」
宗達　「たった今、大仕事を引き受けた」
丑寅　「あれあれ、何だか今日はいつもと違って調子がいいぜ」
宗雪　「大仕事とは」
宗達　「お前ら、すぐそこの養源院は知ってるな」
宗雪　「ええ。もちろん」
丑寅　「元々、淀の方がお建てになったが焼けちまった寺だろ」
宗達　「そうだ。その後、娘のお江様が再建された」
宗雪　「まさか、あの養源院からお声が」
宗達　「おおよ。住職の成伯様から直々にご依頼があった。
これは内々だがな、来年、徳川家の家忠、家光公が揃って御上洛され、
その際、お立ち寄りになる」
宗雪　「将軍様が直々に」
丑寅　「おほっ、凄え」
宗達　「だから、手つかずのままの襖絵を、急いで仕上げなきゃならなくなった」
宗雪　「しかし、あそこは確か狩野派の」
宗達　「ああ。あいつらが引き受けて納めるはず。
ところが、連中は江戸に移ってこっちは手薄だ。

しかも、もうじき二条城の改修が始まる。元来、あそこン家は徳川の御用勤め。
すでに、そっちの仕事で、ここまで手が回らなくなったって話よ」
丑寅「なるほど、そんで家に白羽の矢が。やりい！狩野派の仕事を分捕ったのか」
宗雪「このような由緒ある寺の襖絵を、御用絵師以外が手がけるというのは」
宗達「もちろん初めてだそうだ。都で聞こえてくる家の評判と、今までの奉納絵の出来栄えが気に入ったんだとか」
丑寅「町の絵屋が御用絵師と肩を並べて仕事を残す。兎に角、こいつは前代未聞。
天地がひっくり返ったな、こりゃ」
丑寅、逆立ちしておどける。
宗達「（笑）阿呆が。調子に乗るんじゃねえ」
宗雪「物は何です」
宗達「松の木の襖絵二十面。それも大急ぎで」
宗雪「それでは、早速、手を回しましょう。それでなくともここのところ、狩野派の連中が都中の絵の具を買いあさってるって噂だ」
宗達「よし、そっちは任せた。それから、職人を半分引きつれる。工房で足りねえのは新しく集めろ。堺、大和、どこからでもかき集めて」
丑寅「親方、俺は」
宗達「お前はお店に残れ」
丑寅「そんな！そりゃねえだろう！こんな大仕事に俺をほっぽりだすなんてよォ」
宗達「嘘だよ。連れてってやるから邪魔すんな」
丑寅「戯言を言うなんざ久方ぶり。ひでえな、人が悪いぜ」
宗雪「それだけの作業なら作業場はどちらに。お店の工房を別へ」
宗達「工房を移す方が時間がかかる。何しろ急ぎだ。丑寅、頂妙寺へ走れ。あそこの住職には前々から事ある時にはと、断りを入れてある」
丑寅「よしきた！」
宗達「何でもいいから、兎に角、急げ。準備を整え次第、今日からでも仕事に掛かるぞ」
丑寅「やったるぜえ」
宗雪「狩野派と対抗ですね」
宗達「対抗だと。何の、それ以上よ」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
宗雪を残して、一同退場。
公軌、登場。
公軌「養源院の襖絵といえば、私も噂は耳に。
一度はこの目で拝見致したいと思うておりますが、
何せあそこは徳川家、菩提所の一つ。おいそれと近づくことも出来ず。
それでも出入りの者から伝え聞いた話では、それは見事な出来とすこぶる評判」
宗雪「確かに本人の気合いの入れようは大したもので。
注文通り、襖絵には松の木と大岩のみ。大和絵の定石を踏んだ題材ではありますが、
親父様独特の大胆な図柄となってございます。ただ…」
公軌「ただ、どうされた」

宗雪　「これが思いもかけず大きな騒動に。話を聞きつけた狩野派が、いきなり絵を突っ返せと寺に詰め寄りまして」
公軌　「絵を。しかし、元はと言えば、あちらの手が足らないために頼まれたお仕事でしょう」
宗雪　「向こうも気位が高こうございます。格下の絵屋に自分たちの神聖な領域を侵されたと、恐ろしいほどの剣幕で」
公軌　「それはまた乱暴な。まるで縄張り争い」
宗雪　「天下のお仕事とは大小そのような小競り合いが付きまとうもので。しかし、家にとっては初めてのこと。騒動となりました」

丑寅、登場。

丑寅　「おうよ。あれ程、腹わた煮えくり返ったことはねえ」
宗雪　「やっぱりまだいた。お前、とうとう行く気はなくなったね」
丑寅　「行くよ。すぐに行くって。しかし、今の話が聞こえたからにはもうどうにもじっとしていられねえ。あんなに皆で大騒ぎしたのは初めてだったからな」
公軌　「ほほ、それはまた面白そうな。いや、これは不心得なこと」
宗雪　「いえいえ。まさに一大事」

照明、ＣＨＡＮＧＥ。

公軌、退場。

丑寅、形相を変えてパネルをぐるりと巡っている。

丑寅　「どこかに合い口ねえか。なけりゃ、土間の菜っ切包丁でも」
宗雪　「何だ、何事だ、一体」
丑寅　「喧嘩だ、喧嘩。出入りだぞ、おい！」
宗雪　「物騒な物言いをするんじゃない」
丑寅　「これが黙ってられるか。俺は敵とってやるんだ敵」

丑寅、ようやく見つけた、はたきを手にする。

宗雪　「敵。何のことだ」
丑寅　「山楽って野郎よ」
宗雪　「山楽、それはどこかの遊女か」
丑寅　「阿呆、京狩野派の頭だ。入道みてえな成りした大男」
宗雪　「狩野山楽！お前、山楽様と何かあったのか」
丑寅　「家柄なんかでびびってんじゃねえ。端から気合い負けしやがって」
宗雪　「まあ、待て。落ち着け。いいから、きちんと説明してみろ」
丑寅　「これが落ち着いてられるか。家の親方が大勢の前で恥かかされたんだぞ」
宗雪　「親父様が」
丑寅　「俺たちが襖絵を納めたところに、狩野派の連中が、いきなり、どかどか上がり込んで来やがってよ。そしたらどうだ。親方の絵を一目見るなり大笑いしやがった。通りまで聞こえるようなでっけえ声出して」
宗雪　「何だと」
丑寅　「あいつら、まるで分っちゃいねえんだ、親方の描く絵ってもんを。あの若木から老木までをずらっと並べた松の木の姿。もりもりと盛り上がる太い幹や、枝葉の細い線を墨の濃淡で表してみたことさえ、

これっぽっちも分かろうとしやしねえ」
宗雪「それで」
丑寅「そのまま住職に詰め寄って、自分たちが書き直すからすぐに襖絵を取り外せと」
宗雪「まさか、成伯様は認めたのか」
丑寅「阿保言え。元より住職は親方の絵を気に入ってんだ。
すでにもう一つ新たな依頼をしてあるから、せめて出来上がりを見てからでも遅くはないだろうと、どうにか連中を取りなして、その場を収めた」
宗雪「狩野派の連中は」
丑寅「口では静観するとは言ってるが、収まりきらずにその場で居座ってやがる。
だから、俺が今からこうして」
宗雪「待てと言うに。成伯様からの、もう一つのご依頼とは」
丑寅「血天井前の杉戸絵よ」
宗雪「血天井。それは何だ」
丑寅「伏見城落城の折、残党の兵が床板に残した自刃の跡を、
供養のためにと、残り血そのままで本堂の天井に使うのよ。
こいつはお江様、肝煎りの命だ。
ところがあの連中、薄気味悪がってそいつに手を付けていなかった。
だから、親方はあらためて厄払いの守り絵をとご依頼され」
宗雪「引き受けたのか」
丑寅「もちろんよ、一も二もなく。すぐにこの場で描いてみせましょうと」
宗雪「親父様は」
丑寅「もう始めてら」
宗達、登場。
大筆を担ぎ、たすきを掛けの姿。
狩野派の絵師たち、後をついて雪崩込んで来る。
喧々囂々。
山楽「ふざけるんじゃねえ。その手を止めろ。本堂の神仏が汚れる」
宗達、多勢に向かい立ち。
宗達「やんややんやとやかましい！四の五の言うのはちいと待ってろ。
今からこの墨たっぷりつけて、この天井の門番に相応しい守り絵を、
描いて見せるから黙ってやがれ！」
宗達、床に大筆を思い切って流し出す（白筆、墨無し）。
大きく、大胆に力強い仕草。
宗達、大筆を抱え、縦横無尽に床へ線を描きながら、退場。
一同、宗達を追いかける。
丑寅「あの連中、どうせどんなもの持って行こうが難癖つけて認めやしねえ。
だったら、この俺が入道と取っ組み合って」
宗雪「乱暴なことを言うな」
丑寅「こいつは親父様、一世一代の大仕事。誰にも邪魔させたりしねえ」
慶春「旦那様！」

宗雪　「どうした」
慶春　「大旦那様が」
丑寅　「親方に何か」
慶春　「今すぐありったけの金箔を運んで来いと。それも飛び切り上等のやつを」
宗雪　「金箔を」
慶春　「杉戸の絵にお使いになるそうで」
丑寅　「背景を金地にでもするつもりか」
慶春　「いいえ」
丑寅　「違うってのか」
慶春　「はい、下絵はすでに仕上がっております」
丑寅　「何」
宗雪　「もう仕上がっただと」
慶春　「大旦那様は大筆を使い、一気に描き切ってしまわれました」
丑寅　「凄え」

宗達、再び大筆を流しながら登場。
狩野派、追いかけてくる。
宗達の筆が止まる。

宗達　「まずはこいつを俵屋宗達の身代わりとして置いていく。
毛嫌いしようが笑おうが手前ら勝手。
それでも我慢ならねえと言うのならワシが相手になってやる。
文句があるならいつでもかかって来んかい」

喧々囂々、声を上げる狩野派。
宗達、再び大筆を流し始める。
一同、宗達の動きに右往左往。

宗雪　「それで」
慶春　「ついでにもう一つと、奥の杉戸も描かれております」
丑寅　「狩野派の連中は」
慶春　「それがもう収まりきらぬ様子で。お願いします、お早くこちらに」
丑寅　「よしきた」
宗雪　「今すぐ持っていく」

丑寅、宗雪、慶春、退場。
宗達、筆を流し終える。
狩野派、俵屋、一同、罵声の嵐。

山楽　「ええい、その絵を返せ！これ以上はもう捨て置けぬ」
宗見　「下がれ下がれ！」
宗運　「それ以上、近づいたらただじゃおかねえぞ」
利慶　「大旦那の邪魔はさせねえ」
山楽　「お前たちは絵師ではない。一寸、絵の描ける町の職人だ。素人相手の絵屋にすぎん」
狩野派　「そうだ！そうだ！身の程をわきまえろ」
宗見　「何を畜生、言わせておけば」

宗運　「そこから下がれ！絵に触れるな」
　　狩野派の若者が、飛び込んで来る。
若者　「山楽様」
山楽　「邪魔するな！今、取り込み中だ」
若者　「いや、しかし！しかし」
山楽　「何事」
若者　「只今、若がお出向きに」
山楽　「何、若が！」
　　采女、登場。
　　狩野派一同、一斉に静まる。
采女　「乱暴な声が表まで。狩野の家の品が問われる。山楽、やくざはお止しよ」
山楽　「若、こいつばかりは捨て置けませぬ。
　　大御所のお亡くなり以来、京の仕事も落ちました。
　　とうとう絵屋の者たちが寺の襖を扱う時代に」
采女　「元々、ここの仏間は、お前が仕上げておるはずでは」
山楽　「それが、先代孝信様のご葬儀と重なり、やむ無く。
　　加えてこの度、二条城のお呼びがかかったこともあり」
采女　「それはお前、手前の都合。
　　一旦、筆置いた仕事の後始末に、お寺に手数までおかけして。
　　それで文句を言うなんざ、後出しはみとむもないというもんだよ」
山楽　「若」
采女　「まあいいから、一旦、お収めよ」
狩野派　「しかし、若、若」
采女　「お前たち、私に二度同じことを言わせるお気かい」
　　狩野派、すごすごと下がる。
采女　「宗達様と仰るのは」
宗達　「（腰を下ろし、汗を拭きながら）へい」
采女　「（丁寧に頭を下げ）狩野采女にございます。数々のご無礼、何卒。
　　伝え聞きますれば、此度は、こちらの不手際、間に合わすため、ご尽力を頂いており
　　ますとのこと。ご不快もっともでございましょうが、同じ絵師同士、お仲間の好にて、
　　ここは一先ず、お鎮め頂きますよう、お願い申し上げます」
宗達　「ようやく分別のあるお方のお出ましのようだ。
　　何、ワシらはご住職のお申し出により、ここへ絵筆を入れたまで。
　　狩野のお家に義理立てなど、端からございません故、気遣い無用に願いましょう」
采女　「真に寛大なるお言葉。お志に胸を撫で下ろしてございます。
　　狩野家一同に成り代わり、あらためまして、御礼を。
　　さりとて、私共、代々天下のお勤めをお預かりする絵師の家筋。
　　御用の絵師とは聞こえはいいが、一筆一筆をこの首さらし、
　　身命かけてお仕えせねばならぬこと受け継ぎますれば、
　　このままお任せ致しますと、絵も見ず捨て置くことも出来かねる。

この上は狩野の名にかけ、失礼を承知で、拝見仕る覚悟にございます。
何卒、今一度、お許しを」
宗達　「よございましょう。この場はお任せ、存分にご覧あれ」
采女　「益々もって寛大なるお言葉。痛み入る次第にございます。
但し、お断りを申し上げておきますが、私めが申しましたことそれは、
真贋叶わぬあかつきには、此度の仕事、すべて我らの手に戻し、
一から描き直しをさせて頂くということでございますが」
宗達　「ワシは今、目の前のあなた様に、存分、ご覧あれと。
さては住職と茶でもすすり、庭でも眺めておりましょう。
終わりましたら、どうぞお声を。誰かたすきを外してくれや」
慶春　「は、はい」
宗達、慶春を引き連れ、退場。
狩野派　「おい、待て！待たんか」
采女　「静かにおし」
山楽　「若」
采女、くるりと背後に返り、パネル（白地）を黙って見始める。
宗雪、丑寅、駆け込んでくる。
丑寅　「おい、親方は！」
狩野派　「シーッ！」
宗雪　「どうした」
長き間。
采女、漏れるようなため息。
采女　「お前たち、帰るよ」
山楽　「若！」
宗雪　「あの」
采女　「重ね重ねのご無礼、平にご容赦。手前勝手は承知してございますが、
急ぎの仕事を置いて来ております。止む無くすぐに戻らねば。
宗達様にお伝え下さいませ。このお詫びはいずれ必ず」
宗雪　「よ、よございますとも」
采女、深々とお辞儀し、退場。
狩野派　「若！若」
山楽たち、采女を追いかけ、退場。
丑寅　「認めた！親方の絵を認めやがった」
俵屋一同、大歓声。
丑寅　「今の誰だ」
宗見　「采女とか何とか」
宗雪　「采女」
丑寅　「知ってるのか」
宗雪　「采女といえば、永徳の孫だ。江戸に渡った狩野派の棟梁」
宗運　「狩野永徳の！」

利慶　「棟梁。あんなに若えのが」
宗見　「凄え！凄えよ、こりゃ」
丑寅　「兎に角、認めたぜ！認めやがった」
宗運　「おい、すぐに親方呼んで来いよ」
利慶　「（走り行く）へい」
宗雪　「それより先に絵を見たい」
宗見　「絵ならすぐそこに」
丑寅　「どれどれ」
宗運　「あちらです」

垂れ幕に映し出される「杉戸の唐獅子図（左方）」。
一同、並んで大笑い。

丑寅　「こいつはいい！こいつは」
宗見　「ひっくり返って逆立ちしてやがる」
丑寅　「狩野派の連中に唸り声上げてるみてえだ」
宗雪　「こいつに金箔を貼り巡らせるのか」
丑寅　「杉戸絵に金獅子。見たことも聞いたこともねえ」
宗雪　「もう一つは」

垂れ幕に映し出される「杉戸の白象図（右方）」。

一同　「おお！」
丑寅　「唐獅子に白象。なるほど。普賢菩薩に文殊菩薩の使い」
宗雪　「本堂、阿弥陀如来の守護神。これを一気に描いてしまわれるとは」
丑寅　「しびれるね。やっぱり、俺の親方だ。ここぞという時、魅せてくれるぜ」
宗雪　「おい、親父様はまだか」
宗運　「今、住職にご挨拶を」
丑寅　「何だい、勿体ぶってねえで、こっちへ来いってそう言えよ」

慶春、利慶、登場。

宗見　「来た来た」
宗運　「おい、慶春」
慶春　「あの…大旦那様が」
宗雪　「何だ。どうした」
丑寅　「騒ぎは終わったからと、そう伝えたんだろ」
利慶　「はい…それが」
丑寅　「何だよ、どうした」
宗雪　「親父様に何かあったのか」
慶春　「その…難しい顔をして何にも仰らなくなったんで、困っちまって」
宗雪　「喋らなくなった」
丑寅　「何だ、喜び噛みしめて一人浸ってやがんのか、おい」
宗雪　「一体、どうした」
慶春　「いえ、あの…特に何も」
宗雪　「何もなくて黙り込んだりせんだろう。何かはあったはずだ」

慶春　「それが…あの…ご住職様と話してから急に」
宗雪　「住職と」
丑寅　「まさか、この一件でお小言頂戴してるわけじゃ」
利慶　「いいえ。あちらは至って和やかでございます」
丑寅　「だったら、何だってんだ。やっぱり格好つけてやがんのか」
慶春　「何ですか、お口添えが雁金屋さんというお話が出た途端、急にお黙りになって」
宗雪　「雁金屋」
丑寅　「織物屋で大商いをしている、あの尾形宗伯のところか」
慶春　「そうです」
丑寅　「尾形ん家はうちと親戚筋だろう」
宗雪　「そうだ。遠縁にあたる」
丑寅　「仲たがいでもしてるのか」
宗雪　「まさか。あそことは家の先代が唐織物を扱っている時代からの仲。
　元々、雁金屋は浅井家に仕えた時代に始めた呉服商」
丑寅　「なるほど、養源院は浅井家の菩提寺。それで口利きを」
宗雪　「そうか…」
丑寅　「どうした」
宗雪　「随分前に書状を。尾形の家は代替わり、宗伯さんは隠居されるという」
丑寅　「隠居くらいするだろう。それがどうした」
宗雪　「その時、宗伯さんは鷹ヶ峯に移られた」
丑寅　「鷹ヶ峯！」
宗雪　「本阿弥家のすぐ傍に家を構え、共に生活を」
丑寅　「本阿弥…。また光悦か」
　照明、ＣＨＡＮＧＥ。
　一同、退場。
宗雪　「それから以後、親父様は様子が変わってしまわれ。
　訳は何も申しません。ただ黙々と注文の絵を描き続けるのみ。
　口数も少なく、すっかり引き込もってしまわれて」
　暗転。
　垂れ幕の杉戸絵も消える。

（俵屋　座敷　一六三〇年）
　宗達、羽織袴で登場。
　きまり悪そうに、やたらと咳払いが多い。
宗達　「ええ…俵屋の宗達にございます。
　この度、思いもかけず、朝廷様より法橋の位を頂戴仕り、
　何ともはや、恐悦至極に存じ奉ります。
　ええ…このような大役を仰せ仕りましたること、
　ひとえに、皆様方より多大なるご贔屓を頂きました賜物。

ええ…兎にも角にも、これより先、一層精進致します故、
今後ともご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げ奉ります（お辞儀）」
奥から弟子たちの声。「よっ。よっ。俵屋」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
宗達、咳払いしながら席を立つ。
羽織と袴を脱ぎ出す。
宗雪、女将、利慶、慶春、登場し、着替えを手伝う。
その後ろをぶらぶら、丑寅、登場。

丑寅　「よ、法橋。めでたいね」
宗達　「…」
丑寅　「法橋といやあ、絵描きで一番偉え位だろ。天下で一番てことなんだろ」
女将　「もちろんじゃないのさ」
丑寅　「えれえことになったな。よ、よ、どんだけ金積んだ」
宗雪　「阿呆言え」
丑寅　「さては俺たちが聞かされてるよりお店は儲かってるな。野郎、給金上げろ」
利慶　「今夜はみんなにも尾頭付きだって。まかないのお清どんがそう言ってた」
慶春　「報奨金なんて出るのかなあ」
女将　「そりゃうんと出ますよ。そうでしょう」
宗雪　「何かお心づもりでも」
女将　「飛び切りの西陣をもう注文してあります。孫たちの分まで」
丑寅　「そういや、昨日、呉服屋が顔出してた」
女将　「いいじゃないの。こんなこと二度とないもの」
宗見、宗運、登場。
宗見　「大旦那様、祝いの品や、お誘いの使いが次々にやって来ております」
宗運　「どちらへお通しましょう」
宗達　「みんな断れ」
宗雪　「親父様」
丑寅　「おい、何だい」
宗達　「断ってみんな帰せ」
丑寅　「ようよう、格好つけてんのか。折角、皆で盛り上がろうって時に」
宗達　「宗雪、色紙をたんと用意しろ」
宗雪　「色紙ですか」
宗達　「そうだ。五十枚でも百枚でも」
丑寅　「これだ。また困ったちゃんが始まった」
宗達　「今からまとめて伊勢物語を描き出す。急ぎで色も入れるから、工房の連中にも声かけろ。終わるまで誰もここへ通すな」
丑寅　「何だよ、様子が変だぞ」
宗達　「済んだらすぐに出かける。供は付けねえ、お前と二人で行くから支度を」
宗雪　「分かりました、さっそく手筈を。それで、お出かけはどちらに」
宗達　「嵯峨野だ」

宗雪　「嵯峨野」
丑寅　「お、おい、親方」
　宗達、退場。
　一同、戸惑いながら、退場。
　照明、ゆっくりとＣＨＡＮＧＥ。
　弟子たち、慌てて出入りし、宗雪に替えの羽織をかけていく。
　その後、舞台上（絵所）に土色の大布をかける。
宗雪　「そのまま、親父様は部屋へこもり、ひたすら色紙絵を。
　色を入れる指示をしてはまた戻り、次の絵にかかるといった具合。
　そうして、伊勢物語の全段を一気に描き切ってしまわれた。
　出立したのは朝早く。ひと時も休まず歩き続けて…。
　いつもと様子の違うことは、見るより明らか」
　宗達、登場。
　宗雪、弟子たちから包みを受け取り、宗達の元に向かう。

（嵯峨・峠道）
　遠くで渡り鳥の声、聞こえる。
宗雪　「親父様、こんな寂しい峠の奥で…。誰かと待ち合わせるのに本当にこんな場所を」
宗達　「…」
宗雪　「誰なんです」
宗達　「…」
宗雪　「親父様」
宗達　「宗雪、今日あったことは誰にも話しちゃいけねえ。家に帰っても何にも言うな」
宗雪　「誰なんです」
宗達　「角倉素庵」
宗雪　「素庵様。しかし、角倉のお屋敷からはまるで離れておりますが」
　間。
宗達　「素庵はな…家を出された。家督も譲り、身分も捨てて」
宗雪　「そんな。真面目一辺倒のあの方が…。まさか、不始末でも」
宗達　「いいや。あれは何にもしちゃいない。何もな！」
宗雪　「では…一体」
宗達　「（言葉に詰まり）…」
宗雪　「親父様」
宗達　「素庵はな…。らい病を患った」
宗雪　「らい病！」
宗達　「お前も知ってはいようが、あの病に薬はねえ。
　病になれば家の者は病人を追い出し、名も取り上げるのが世間の決まり。
　後は野山へ打ち棄てられてのたれ死にか、棄て人の集まり処で物乞いをして暮らすか
　どちらかしかねえ」

宗雪「知っています。清水の外れにも、行き場を失くした者たちが、ただ死を待つのみの宿があるとか」
宗達「あいつも家を出されたが、息子たちが内々に手を打って、何とかここへ落ち着いた。今、書生の宗充一人が面倒を見ている」
宗雪「親父様は、いつそれを」
宗達「法橋お披露目の前の晩、宗充が使いを。受け取った手紙によれば、ワシの描いた色紙を素庵が所望している。出来れば好きな芥川やゆく蛍を」
宗雪「それで、伊勢物語」
宗達「利より徳を重んじ、あれだけ熱心に世のため尽くした者もいまい。よりにもよってどうしてあいつが…」

宗充、静かに登場。

宗充「宗達様」
宗達「宗充さん」
宗充「(深々とお辞儀) 遠路、遥々…」
宗達「手紙をありがとう。お指図通りに取り計らったぜ」
宗充「恩に着まする。真に…真に」
宗達「素庵は今、どこに」
宗充「それが…。宗達様、どうかお許しを。先生はお会いすること儘なりません…」
宗達「会えない。まさか、病がそれほど」
宗充「確かに病は進んでおります。しかし、歩いたり動いたりすることはまだ辛うじて」
宗達「それなら一目。兎に角、会って話を」
宗充「お許しください。お許しください。先生はもう、どなたにもお会い致しません。親しい方にも、身内にも。ご自分のお姿を…見られたくはないのです」
宗達「姿を」
宗充「あの病気は皮膚を傷めます。体中がはれ上がり、髪は抜け落ち、姿形をまるで変えてしまう。ここへ来るまで、先生がどれだけ傷ついたことか。角倉の嫡男としてあれほど家を大きくし、商い、学問に尽くしたお方を、親類縁者をはじめ、世の中は疫病神のごとく打ち棄てたのです。先生は絶望されておられます」
宗達「ああ、素庵。何という…」
宗充「それに、お医者様の話では間もなく目も」
宗達「目、視力まで」
宗充「この病は徹底的に人の体を蝕みます。すでに暗がりではその予兆が。だからこそ先生は、今、ご自身の光があるうちに、長い間、手をかけて来られた漢詩の製本を仕上げておしまいになり、そして最後に、これまでお世話になったご友人の方々に自らの書を。それを、心づくしに残しておきたい。その下絵には宗達様、あなた様の絵をおいて他にはないと。無理を承知でお願いをし、秘かに手紙をしたためました。

この上はどうか、先生のご心中お察しいただき、何も言わず、洛中へお戻りを…」
宗達「いいかい、宗充さん。ワシがここへ来たのは、
ワシとあの男が、一緒に仕事をしただけの間柄と思っちゃいないからだ。
今日、こんな時でさえ、友として頼りにしてくれたことが何より嬉しい。
ワシは病など怖くない。どうか一目。一目会ってこの絵を直に託したい。
頼むから今一度、素庵の元へ走り、願いを届けて欲しい。
この通りだ。ワシはいつまでもここで待ちます」
宗充「宗達様…私とて苦しい、会って頂きたいのです。しかし、先生はもう…」
宗雪「宗充さん…」
よく聞くと、奥から聞こえてくる、すすり泣きの声。
宗達「素庵か。素庵だろ！」
宗雪「ここへお越しに」
宗充「実を言うと…本日わざわざここまでお出で願ったのは…
今生の名残、一目宗達様を拝見したいと。
先生は、先程から木々の間より…」
宗達「どこだ。素庵、ワシだよ、宗達だ」
声「宗充…」
宗充、はやる宗達を制して、パネルの奥へ退場。
遠く渡り鳥の声。
ややあって、再び宗充、登場。
泣いている。
宗充「宗達様、どうぞ、そのまま。（頭を下げ）宗雪様、どうか」
宗雪を連れて反対側へ退場。
宗達「素庵」
声「宗達、どうか動かないで」
宗達「分かった…。ここにいるよ」
声「ありがとう」
宗達「素庵よ、ひどいじゃないか、出し抜けに色紙絵なんて。
もっと前から頼んでくれてりゃ、立派な額で持って来たのに。
泡食って筆を走らせたもんだから、細かいところは言いっこなしだぜ」
声「心配などしていない。誰よりもあんたの腕を買っているよ。
すまなかったねえ。わざわざ、こんな遠い所まで」
宗達「何を言ってる水臭え。これからはしょっ中、寄らせてもらうぜ。そうだろ」
間。
宗達「それにしてもこんな寂しい所。酷えもんだ、体の具合が一寸悪くなったくらいで」
声「宗達、お願いだから家の者を悪く言わないでおくれ。皆、憎くてした始末じゃないよ」
宗達「しかし、お前」
声「確かに親類の中には酷い者もいたがね。しかし、それにしたって家は商人なんだ。
周りから悪い評判でも立てられちゃ、皆、総倒れだからね。
それこそ、何のために今まで家を大きくしてきたのか分かりゃしない。

これも天からの運命、仕方がないさ。
ただね、私は最後に一目…お前さんに会いたかったから」
宗達「もういい、こっちへ来い。ワシは病なんか怖くねえ。本当だぜ、なあ、素庵よ」
間。
杖をつき、着物の下、全身をさらしで巻かれた、素庵、登場。
目と口だけがかろうじてほんの少し開いている。
素庵「どうだい、こんなになっちまったよ…」
宗達「(近づいて手を取る)素庵!」
素庵「おいおい、痛いよ。お前のその太っこい手じゃ、丈夫な時だって骨が折れちまう」
宗達「おう…そうか、すまねえ。すまねえ。(笑)つい、気がせいちまって」
素庵「ありがとう、よく来てくれてた」
宗達「何言ってやがる」
素庵「(包みを指し)これか」
宗達「おう、そうだ。お前が望んだ伊勢物語」
素庵「見せてくれるか」
宗達「もちろん」
二人、脇の台に腰を下ろす。
素庵「ほお、見事だ。見事だよ。私の眼にはもう微かにしか映らんが、それでもこいつが見事なことは確かに分かる。輝いてるね、絵が輝いてるよ」
宗達「景気よくこれでもかって、五色と金銀を使ったぜ。お前ェのためなら何でも描く。いくらだってよ」
素庵「思い出すよ、嵯峨本を始めた日のこと。あの時は楽しかったな。光悦様、紙師の宗二さん、それに、摺師、彫り師の面々。皆であれやこれや、夜通し意見を出し合って。徒然草、方丈記、豪華絢爛なものから、誰もが手に取りやすい謡曲集まで。ありとあらゆるものを出版したよ」
宗達「そうとも。お前の読みは見事に当たって、あの後、皆がこぞって新しい本を作り出し。お前には先を見る目がある。言うことみんなその通りになったんだからな」
素庵「町では出版した本を手に持って、稽古ごとに通う娘たちが行き交う。物語を呼んだ者たちが夜な夜な集まり、本を肴に話し出す。本はあらゆる人々の楽しみを増やし、思考を巡らせ、生活を変える。私はこの世に生を受け、皆に必要とされる物を作った。人に喜ばれ、歓迎される仕事を」
宗達「そうとも。そうともよ」
素庵「印刷の技術はまだまだ向上して、今よりもっと身近になっていくだろう。そのうち、本を読むことは日常当たり前になる時代が来ると私は信じている。やれてよかった。やってよかった。姿形はなくなっても、私の生きた証は残る。これもみんな、お前さんのお陰だよ」
宗達「何を言う。ワシなんて何も」
素庵「法橋におなりだとか」

宗達　「ん、ああ…」
素庵　「これでとうとう、天上まで認められたな」
宗達　「（やたらと首をかしげて）…」
素庵　「どうした」
宗達　「（首をかしげて）いや…」
素庵　「何だい、お前らしくもない」
宗達　「ワシのことはいいよ…」
素庵　「どうした。何かあるなら言ってくれ。私にならどんなことでも」
宗達　「こんなこと…まさか今日、お前に話をするとは思ってもいなかったが…。
　　ワシはな、もう筆を置こうと考えてるよ」
素庵　「筆を」
宗達　「なあにね…。ワシは金と銀を好んで使うが、知らず知らずのうちに、ワシ自身が金ぴかの着物をあてがわれてた気がする。居心地が悪くって仕方がねえのよ。
六波羅の外れで扇や短冊に下絵を描いてた時と、ワシは何にも変わっちゃいねえ。何一つな。それがどうも、近頃、さっぱり。
注文の顔ぶれだけはやたらと変わり、分不相応に大名、門跡、大商人、
最近じゃ宮中までもが注文に名を連ね、仕上げを待ってる。
それなのに、手前ェの絵ときたら、未だ一向、満足に描けたためしがねえ。
夜中、一人目を覚まして、鴨川の河原敷きまで歩いて出ることがある。
静まり返った真っ暗な中で、じっと、川の音だけを聞いて考えにふけると、
ワシはつくづく自分が絵を描いちゃいけない人間なんじゃねえかと思うよ。
そいつを分からせるために、神仏はわざと世間の評判を上げて、
次々と明るい場所にワシの絵を掲げ、いつかその腕前を皆に気づかせて離れていく日を、わざわざ、こさえてんじゃねえのか。
そうでもしねえとこの阿呆は、いつまで経っても己惚れて、上手くもねえ絵を無駄に続けてしまうから。
　　間。
光悦様がいらした時には…。
いつも食らいつけとばかりに無心で筆を走らせた。
しかしな、養源院の唐獅子、白象を描いた時、とうとう越えられぬ山と悟ったよ。
あの人は、ワシがここで何を描くか、とっくに見透かしていた気がする。
いや、確かだ。ワシには分かる。
ワシの絵は、いつだってどこを見ても、あの人の影がちらつく。
いつかあの人の書が乗せられるのを心のどこかで待ち望んでる。
杉戸絵に和歌をしたためるわけでも、襖絵に墨置くわけでもないのに。
ワシの生み出す絵は、本当に自分の内から生まれたものなのか。
ワシの生み出してきたものはすべて、あの人の頭の中にあるものを書き準えてるだけじゃねえのか。そう考えたらお前、どうにもやり切れなくなってな。
到底越えられねえと悟ったからには、いっそ、男らしく負けを認めて終わりにしようと、そう考えていたところさ」

素庵、高らかに笑い出す。

素庵「宗達。羨ましい、羨ましいぞ」

宗達「素庵」

素庵「悩め。大いに悩め、宗達。迷いながら道を歩み、立ち止まっては考えろ。
私はね…今、朝起きて、まだ人気のない保津川のほとりを歩く時、
胸のこの辺りに、たまらなく溢れるような感情が沸き起こる。
この世はこんなに美しかったか。こんなに心動かすものだったか。
沢山の本を読みふけり、多くの漢詩や和歌を身に着けても気づけなかった真理を、
ここへ来て知ることになろうとは。
悔しい…。悔しいのさ。
もっと仕事が出来たのに。まだまだ好きなことを精進していられたのに。
人生は何と、何と短いことか。
こいつはな、如何にお前が偉大な絵描きでも、きっとまだ分からんはずさ。
私だって、人生の最後に、そいつがようやく分かったよ。
もがけ宗達。まだまだ。まだまだ」

素庵、「本朝文粋」（和漢朗詠集「餞別」）詠う。

「前途みち遠し
思いを雁山（がんざん）の暮雲（ぼうん）にはせ
後会とき遥かなり
纓（えい）を鴻臚（こうろ）のあかつきの涙にうるおす」

宗達「…」

素庵「宗達、ここへはもう来ちゃいけない。
私のためでもない。家や体裁のためでも。
お前の絵のためにそうしておくれ。
お前はお前の仕事をもっと残さなくちゃいけない。
お前にしか描けぬものを最後の最後まで追い求めて。
お前の絵は、人の心に確かに残る。私はそれが誇りだよ」

宗達「（言葉に詰まり）素庵…ワシは」

素庵「言うまい。何も言うまい。（包みを抱え）
よく来てくれた。こいつを私の最後の仕事にするよ。
大切に一枚、一枚、私の魂と感謝を込めて、精一杯したためよう。
これが出来れば、私はもう何も思い残すことはない。
これまでだ、宗達。さらば」

素庵、退場。

宗充、駆け出してくる。

宗充「（深々とお辞儀）宗達様…」

宗達「急いで荷を…。あれが一人では重かろう」

宗充、更にお辞儀をし、退場。
宗雪、登場。
間。

宗達「さらば。さらば。さらば。
宗雪、ワシは今…猛烈に何か描きたい」
宗達、退場。
宗雪、立ち尽くしている。
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
遠くで雷のゴロゴロいう音。
弟子たちが土色の布を取り去っていく。
公軌、登場。

宗雪「素庵様がお亡くなりになられたのはそれから間もなく。
人里離れた山の中に密葬の後、ひっそりと墓を建てられ。
宗充さんが知らせをもって現れたのは、それらがすべて終わった後。
結局、あの時、渡した色紙に筆が入れられることはありませんでした。
親父様は色紙を受け取り、親しかったお仲間に渡して回られ、
皆が素庵様のために和歌を書いて捧げました。
そのことを知る者は、ほとんどおりませんが」
宗達、登場。
一人、紙に向かう。
次々と筆を流していく。（白紙、墨なし筆）

宗雪「それからというもの親父様は、入るご依頼を次々に引き受けては、
熱心に筆を走らせ、その度、新しい試みを。
水墨、大和絵、衝立、屏風。描いた絵で絵所が埋め尽くされるほど。
作風はますます大胆。一作、一作、心を留めるものに近づいている様子」
パネル、垂れ幕に次々、映し出される、作品断片の数々。
「槙檜図屏風」
「楊梅図屏風」
「源氏物語　関屋澪標図屏風」
「西行物語　行状絵詞」
「舞楽図屏風」

宗達「一度、心から離れたある姿。
手を伸ばせばつかめようか、その手の先にある光。
暗闇の向こうに一点輝く。
ワシにだけ見えるその光が、唯一の世界ならば、
進んで行こう。それだけを頼りに」
パネル、垂れ幕に映し出される「松島図屏風」。
丑寅、宗雪、覗き見に来る。

丑寅「何じゃこれは！」

宗雪「荒磯の図」

丑寅　「波の線が画面一杯、まるで生き物みてえに」
宗雪　「こんな絵見たことがない」
　　宗達の筆の流れが大きくなる。
宗達　「ワシはワシが心に動く、ありのままを描くと決めた。
　　自然にただ在り、心震えたもの。
　　ワシの心に映る姿を。
　　思いのまま筆を走らせ、思いのままに命吹き込む。
　　描かれたいとワシの下に現れる絵の姿。
　　睨みを利かせて目の前に現れる。
　　おおよ！真剣勝負と行こうじゃないか」
　　パネル、垂れ幕に映し出される「雲龍図」。
宗雪　「龍が黒雲の間を！阿吽の形か」
丑寅　「戻って来た！戻って来たぜ、親方のあの目が」
宗雪　「親父様が！越えられぬ山を今越えた」
　　宗達、流れる筆を止めて。
　　息も乱れて、宗二、登場。
宗二　「宗達さん！宗達さんよォ！」
丑寅　「宗二」
宗雪　「宗二さん」
宗二　「お終いだ！何もかも終わっちまった。
　　（崩れ）アテの人生は…。アテの人生というものは」
丑寅　「どうした、どうしたんだよ」
宗雪　「何事です、一体」
宗二　「光悦様…鷹ヶ峯にて今朝早く…涅槃へと旅立たれた」
丑寅　「何！」
宗雪　「光悦様が！」
宗二　「昨晩、読経の最中、突如お倒れになられ、そのまま…一度も目を覚まされることなく」
　　宗二、泣き声上げて。
　　宗達、胸を押さえ、膝をつく。
　　ゆっくりと暗転。
　　雲龍図も消えていく。
　　遠くで雷のゴロゴロという音。

（俵屋　茶室）
　　宗雪、公軌、登場。
　　遠くで祇園囃子、聞こえる。
　　雷のゴロゴロという音、遠くで続いている。
宗雪　「ひどい沈みようでした。
　　しばらくの間、筆を持とうともせず、朝に晩に経を読み上げる他、音もない毎日。

実は、私共の中では、すでに親父様は筆を置いたと考えておりました。
静かな時を、ただゆっくりと過ごしていくものかと。
不思議なのは、何故、此度のお話を受けると決めたか」
公軌「それは流石に、京五山の一つ、建仁寺からのご依頼とあっては」
宗雪「いえ、名の大小でお引き受けをする気性など端から」
公軌「なるほど。そうでしたな」
宗雪「何かを感じられているように思います。心に触れる何か。
ご依頼の折に、中身のご支持は」
公軌「ありません。すべてお任せです」
宗雪「一体、何が心を動かしたのか」
遠くで雷のゴロゴロという音。
公軌「おや、随分と近くなった。そろそろお暇致しましょう。
急がずとも、いずれ宗達様とはお目に掛かれる」
宗雪「左様でございますか。一雨くる様子、せめて家の者に送らせましょう」
公軌「では、祇園の宿まで。ゴロゴロさんは苦手でな。くわばら、くわばら」
宗雪、公軌、奥へ退場。
丑寅、辺りに声かけ、駆け抜けていく。
丑寅「一雨来るぞォ。一雨来るぞォ。」
宗達、登場。
絵所へ上がり、胸を押さえて腰を下ろす。
祇園囃子、遠退いて消える。
女将、手に盆を下げ、登場。
女将「お前様、これを」
宗達「…」
女将「先達て、富山の薬売りが。（懐から薬紙を差し出し）少しは楽になるだろうと」
宗達「知ってたのか」
女将「馬鹿にしちゃいけません。知らん顔してるようで、何でもお見通しなのが女房というもの。何年連れ添ってると」
宗達「どうして帰ったと分かった（薬を含み）」
女将「通りの向こうから足音が聞こえてました、お前様の。
（盆の湯呑と手拭いを差し出す）嘘ですよ。そのおぶは私が飲もうと思ったの」
宗達「何でもお見通しとは。この年になってあらためて知ることもある」
女将「男は鈍いの。それでいて、いつまでもやんちゃで。
一緒になってつき合ってたらこっちの身が持ちゃしません」
宗達「そんなもんかい」
女将「そんなものです」
宗達「おい」
女将「何です」
宗達「（湯呑、手拭いを返す）ありがとよ」
女将「まあ、何と殊勝な。それなら、たまには若い頃のようにちゃんと名前で呼んで御覧な

さい。私の名前、覚えとりますか」
宗達「阿保言え」
女将「（笑）仕様がない。仕様がないねえ、やんちゃな男は。
（行こうとするが振り返り）お前様」
宗達「む」
女将「いいえ…何でも。おや、風が出てきたね」
女将、退場。
宗達「風…」
丑寅の声「一雨来るぞォ。一雨来るぞォ。」
丑寅、再び声かけしながら戻って来る。
丑寅「親方、戻ったのかい。今の今まで公軌の親父が待ってたのによ」
宗達「そうか。それは気の毒をした」
丑寅「まだ考えてんのかい、何を描くのか」
宗達「おい丑寅、ちいとこっちへ」
丑寅「え」
宗達「ここん所を走ってみろ」
丑寅「何だい、藪から棒に」
宗達「走るんだよ、今ここへ来たみたく」
丑寅「何なんだよ」
宗達「いいから。走れと言ったら走れ」
丑寅「全くよ、俺の人がいいのを利用して。（走り出す）一雨来るぞォ。一雨来るぞォ」
宗達「もっと早く。先刻みたいに」
丑寅「うるっせえなあ、こうかい。一雨来るぞォ。一雨来るぞォ。（足を止め）どうだい」
宗達「（つくづく）不細工よのう」
丑寅「何を！さんざっぱら言う通りにしてみりゃ、暇つぶしの相手にしやがって！
あー馬鹿馬鹿しい！俺ァもう知らねえぞ。知らねえからな」
丑寅、再び辺りに声かけながら、駆け出していく。
雷のゴロゴロという音。
宗達「雨…」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
宗達「夢に見る。毎晩のように。
あれは黒霧の塊か、闇の渦か、
漆黒の淵で霞がかったものがうごめく。
ところが、そいつは一瞬、辺りをみんなはじき飛ばして、
雲をかき分けた先に、その姿を現す。
一面にいかづちが鳴り響いて、風となり光の雨となって。
八方に散った先に見えるものといや…
何だ…眩しくてよく見えねえ、その先…。
（筆をつかんで、前方へ進んで行く）
ワシがこの世に生を受け、生涯かけて追い求めたものは…。

花か鳥か、月か人か、神か仏か、
辿り着いたものは何か。
ワシにしか描けぬもの…。ワシにしか描けぬもの」
雷鳴。
激しい雨音。
上下手、垂れ幕に「風神　雷神」の毛筆文字の大画像。
奥の空間が開き、明るい光の差す中から光悦、登場。

光悦　「目を凝らせ、宗達。その手を伸ばせ」
宗達　「（正面を見据えてたまま）…」
光悦　「お前の心在るままに。我は最早何も口出しせんぞ」
宗達　「黙らっしゃい！」
光悦　「（笑）それでよい。おのれが一人歩む道のり。
元より我は何も言うてはおらん」
光悦、腰を下ろし。

光悦　「我の境地は、今…南無妙法蓮華経…」
一切の音が消える。
大太鼓の一音鳴って、静かに読経太鼓始まる。
光悦、法華経、始める。

宗達　「見える…。そこまではいつだって見えるぞ。
何やら恐ろし気な…、醜い姿…。
獣さながらの…おどろおどろし気な…、
慌ただしく駆け回り、鼻息の荒い面をむき出しにして…、
それでいながら、滑稽で…情けない…笑みさえこぼれるその姿…。
そこまでは見える。いつだってそこまでは。
ワシか…。これはワシの姿か…。
こいつは…何ともつくづく」
宗達、筆を流し始める。
光悦、読経。

宗達　「自分の道のりを返して見れば、何とも無様に駆け出して来たことか。
うろうろと迷い、見っとも無く泣いて、喜び哀しみを繰り返し、
心の内から声を上げては、姿振り乱した格好の悪さ。
何ともつくづく…つくづく不細工なことよ。
おおよ！それで結構。
これまで駆け抜けた自分の道のり。
ワシが生きた！というもの描いてみせる」
宗達、縦横無尽に動き、自在に筆を流す。
「おうよ！おうよ！」の掛け声を上げて。
上下手、垂れ幕の画像が「風神雷神図」に変わっていく。

宗達　「ワシと言えば金の輝き、ワシと言えばたらし込み、
ワシと言えば野太い線、ワシと言えば一対の扇絵、

これまで何度も描いてきた普賢、文殊の菩薩の化身。
一度も描くことのなかった内なる光の中心には、我が神仏か、それとも…」
光悦、読経の声上がる。
宗達、光悦を見やる。

宗達　「そうよあなた。
あなたと歩んだ道こそ我が道のり。
あなたの周りを巡り巡った姿こそ我が道のり。
見っとも無くも不細工に、ぐるりと巡った人生こそ我が道のり。
今更それで悩むこともない。
笑わば笑え。ワシが…ワシの生涯かけて残した姿」
読経太鼓、終了。
光悦、読経、終了。
宗達、筆を流し終え、静かに横たわる。
溶けるように…眠るように。
響き渡る大太鼓の一音。
完成した「風神雷神図」。
ゆっくりと暗転。

（俵屋　中庭　一六四三年）
旅の装いをした宗見、宗運、登場。
暫し、振り返り、絵所を見やる。
慶春、登場。

慶春　「宗見兄（あに）さん、宗運兄（あに）さん」

宗見　「絵の具の買い付けや膠の取り扱いはみんな帳面につけといた。
後の者にもしっかり仕込んでな」

宗運　「慶春、お前は気が優しいから遠慮ばかりしているが、これからは腹据えて、いいな」

宗見　「おいおい、泣くやつがあるかい」

宗運　「そうだ門出だぞ。お互い、晴れの日だ」
利慶、登場。

利慶　「兄さん」

宗見　「利慶」

宗運　「こいさんは」

利慶　「やはり頑としてお残りになられると」

宗見　「決心は変わらずか」

宗運　「京俵屋の灯を消すまいと。そういう覚悟だろう」

宗見　「仕方ない。あの方は一度決めたらてこでも動かん」

宗運　「あの頑固さは、まさに大旦那様譲りか」

宗見　「それで、旦那様は」

利慶　「とうとう折れて最後にお別れを。先に行って荷車で待ってるようにと」
宗見　「そうか、認められたか。一時はどうなることかと」
宗運　「よし、これで心置きなく」
宗見　「行くか」
宗運　「うん、行こう」
慶春　「兄さん、荷物を」
宗見　「いいよ、いいって」
慶春　「お願いです。せめて荷車の所まで」
宗見　「お前、急に頼もしくなったな」
宗運　「いい面構えだ」
宗見　「ほら、また泣く」

兄弟弟子、笑い声を上げ、退場。
琴の音、静かに聞こえ出す。
旅の装いをした宗雪、登場。
振り返り、絵所を見やる。
公軌、登場。

公軌　「宗雪様」
宗雪　「これは」
公軌　「本日、お発ちと聞き及び」
宗雪　「工房の引き継ぎも万端こと済みましたので、ようやく」
公軌　「いよいよ行かれておしまいに」
宗雪　「加賀藩より正式なお沙汰を賜りました。母や若い衆もすでに発たせて。
（琴の音の方角を見やり）ただ、下の娘だけがどうしてもききません」
公軌　「ほう、それではこちらの工房に」
宗雪　「根負けです。あれは特に、親父様の秘蔵っ子でしたから」
公軌　「宗達様、お亡くなりから早、五年。
今やあなた様も法橋の位を受け継がれ、加賀藩の御用絵師にまで。
お父上も、さぞやお喜びでしょう」
宗雪　「いいえ。私はただ、親父様の名を汚さぬようにとそれだけ」
公軌　「我々、妙光寺へお納め頂いた風神雷神図が絶筆の作となりましたこと、真に感慨深い。
心残りは一つ。とうとう、宗達様ご本人と一度もお会いすることなりませなんだ」
宗雪　「面目次第もございません。おそらく前々から、体の不調は気づいていたはず。
しかし、本人のあの気性。家の者にも決して漏らさず。
再び筆を握ったのは、自分が最期を迎える時と感じていたからでしょう」
公軌　「誰にも邪魔をされることなく、存分に筆をふるいたかったに相違ない。
絵師としては本望の御最期。悔いもありますまい」
宗雪　「（頭を下げ）そうお受け取りをいただければ」
公軌　「ところで、あの方は。あれ以来、姿が見えないようだが」
宗雪　「ああ、丑寅でございますか。それが、親父様の葬儀が済んだ翌日から行方が知れず」
公軌　「行方が」

宗雪　「旅に出ると書置きだけを残して。
この家に拾われ、親父様の仕事ぶりを、すべて見届けたように姿を消して。
この工房を引き継ぐのはあの男しかないと思っておりましたが、
どこかへふらりと行ったまま、結局、戻って来ず」
公軌　「そうでしたか。あの方らしいといえばらしいが」
宗雪　「ここへ残る者には、くれぐれも住み慣れた部屋を残しておくように言いつけてあります。それに新しい名前も。喜多川相説。あの男がこの工房に戻る時が来ると信じて」
公軌　「喜多川相説。あなた様と同じ呼び名を」
宗雪　「喜多川も私の実家の姓をそのまま。家にとってはまさに親戚、兄弟との思いを」
公軌　「そこまでのご信頼とは」
宗雪　「自分でも驚いております。これほど心根のわく男だったかと」
公軌　「あの方のことだ、いつかまた、ふらりと戻られましょう」
宗雪　「工房も皆、そのようになればと」
公軌　「さあ、清水辺りまでご一緒に。都を抜けるまでは、まだ先がある」
宗雪　「お心遣い痛み入ります次第で」

宗雪、公軌、退場。

丑寅、登場。

旅に疲れたボロの様相。
宗雪の後姿を追っている。
暫し、うろうろと動き回る様子。
やがて、家の奥へと上がり込んで。
琴の音が鳴りやめば…
完全暗転。

※参考資料

（古今集）（四季草花図下絵古今集和歌巻）
「大方は　月をもめてし　是そこの　つもれは人の　老いとなるもの」
「かつ見れど　うとくもあるかな　月影の　いたらぬ里も　あらじとおもへば」
「あまのがわの　みおにて早けれは　光ととめす　月そなかるる」
「玉だれの　子亀やいづら　こよろぎの　いその浪わけ　おきにいでにけり」
「かたちこそ　みやまかくれの　くち木なれ　心は花に　なさはなりなん」
「ふたつなき　物とおもひしを　みな底に　山のはならて　いつる月かけ」

（三十六歌仙）
「ほのぼのと　明石の浦の　朝霧に　島かくれ行　ふねをしぞ思ふ」
「しら露も　時雨もいたく　もる山は　した葉（ば）のこらず　色づきにけり」
「いづくとも　春のひかりは　わかなくに　まだみよし野の　山は雪ふる」
「三輪の山　如何に待見む（まちみん）　としふとも　たづぬる人も　あらじと思えば」
「かささぎの　わたせるはしに　をく霜の　しろきを見れば　夜ぞ更けにける」
「あすからは　若葉つまむと　しめし野に　昨日も今日も　雪はふりつゝ」
「つきやあらぬ　はるやんかしの　春ならぬ　我身ひとつは　もとのみにして」
「すゑの露　もとのしづくや　世中の　をくれさきだつ　ためし成らむ」
「をちこちの　たづきもしらぬ　山中に　おぼつかなくも　よぶこどりかな」
「東路（あづまじ）の　さやのなか山　なかゝゝに　何（なに）しか人を　おもひそめ剱（けむ）」
「今来むと　いひしばかりに　ながつきの　有明の月を　待出つる哉」
「色見えて　うつろふものは　世中の　をくれさきだつ　ためし成らむ」
「みかのはら　わきて流ゝる　いづみかは　いつみきとてか　こいしかるらむ」
「万代（よろずよ）の　始（はじめ）と今日を　いのりをきて　今行末は　神ぞかぞへむ」
「身にしみて　思（おもう）心の　としふれば　終（つい）に色にも　出ぬべきかな」
「かくばかり　へがたく見ゆる　世中に　浦山しくも　すめる月かな」

「行（ゆき）やらで　山路暮らしつ　ほとゝぎす　今一声の　きかまほしさに」
「はるたつと　いふばかりにや　みよし野の　山もかすみて　けさはみゆらん」

「ぬる夢に　うつゝのうさも　わすられて　おもいなくさむ　ほどぞはかなき」
「ひとふしに　千代をこめたる　つえなれば　つくとも尽じ　君がよはひは」

「秋来ぬと　目にはさやかに　見えぬ共　風のをとにぞ　驚かれぬる」
「つくば山　葉山しげ山　しげけれど　おもひ入には　さはらざりけり」

「常盤なる　松のみどりも　春くれば　いまひとしほの　色まさりけり」
「あたら夜の　月と華と（を）　おなじくは　哀（あわれ）しけれらむ　人に見せばや」

「ねのひしに　しめつる野辺の　ひめこまつ　ひかでや千世（ちよ）の　陰をまたまし」
「水面（みずのおもて）に　照（てる）月なみを　かぞふれば　今夜（こよい）ぞ秋の　もなか也ける」

「誰をかも　しる人にせむ　高砂の　まつもむかしの　ともならなくに」
「ちぎりきな　かたみに袖を　しぼりつゝ　すゑの松山　波こさじとは」

「三芳野の　山のしら雪　つもるらし　旧里（ふるさと）寒く　成まさる也」
「荒玉の　年を送て　ふる雪に　はるとも見えぬ　けふの空哉」

「いはゞしの　よるのちぎりも　たえぬべし　あくるわびしき　葛城の神」
「有明の　つきのひかりを　待ほどに　わがよのいたく　ふけにける哉」

「みかきもり　衛士の焼く火の　よるはもえ　昼はきえつゝ　物をこそおもへ」
「焼ず共　草はもえなむ　春日野を　但（ただ）はるの日に　まかせたら南」

「暮て行　秋の形見に　をくものは　我もとゆひの　しもにぞ有ける」
「秋かぜの　吹（ふく）につけても　問（とわ）ぬかな　おぎの葉ならば　おとはしてまし」